
硝子の薔薇

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝子の薔薇

【Nコード】

N3494M

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

王妃：ミリアム様付きの侍女の<ローズ>は、記憶喪失。
どこの誰なのかもわからなければ 戻るべき居場所も覚えていない。
怪しさ満点の彼女だけど 王妃様は、彼女のことが大好き。

物語の展開に連れて <ローズ>の正体や運命が明らかになっていくミステリー風味のファンタジー。

登場人物（前書き）

少しずつ更新していきます。

登場人物

<ローズ>

記憶を失った状態で 王宮で保護された。

最初は、死刑宣告を受けたが 王妃ミリアムの計らいで 侍女として召し上げられる。

胸に薔薇の痣を持つ。

最初は、周りから疑いの視線が絶えなかったが 現在は、可愛がられているらしい。

髪の色は、純粹な漆黒で 瞳の色は、エメラルド色。

ふっくらとしたウェーブが掛かっているが 仕事中は、いつも三つ編みにしている。

ユウリイ

<ローズ>が発見された王宮を守る若き王。

少しヘタレな面もあるが 臣下達をちゃんとまとめられるだけの心の強さを持つ。

決断力の強さは、誰にも負けない。

赤みの掛かった金髪が 少しでもフワフワとした癖毛で 優しげな灰色の瞳を持っている。。

ミリアム

ユウリイの王妃。

我侬で 周りを巻き込む傾向があるが 剣術や話術が素晴らしい。

夫であるユウリイ王の真名を守る故 刺客に常に狙われる日々。

ストレートの黒髪で いつも三つ編みを纏め上げられている。

王妃になる前に 年の離れた兄を亡くしているらしい。

ナディア

ユウリイの妹。

王位継承権は、放棄し　現在は、王宮付きの女医をしている。
トッド相手だと　感情的になってしまう。
髪の色と瞳の色は、兄と同じく　髪毛は、肩の辺りで綺麗サッパリ。

王位は、返上されたが　相当な美貌の為　未だに縁談は、続いているらしい。

宰相

ユウリイの懐刀。

無口で寡黙だが　影ながら　周りに気を配っている。
眼鏡を取ると　不思議な力を発揮。

ユウリイとナディアとは、乳母兄弟の仲。
艶やかな青みの掛かった銀髪をしており　瞳の色は、紅色だが　眼鏡を外すと虹色に。

顔色は、いつも顔に掛かる前髪によって　滅多にお目に掛かれない。

コーネリア

宰相の妹で　ユウリイの第一騎士。

任務中は、男勝りだが　プライベートになれば　女らしい趣味に浸る。

ユウリイとナディアとは、乳母兄弟の仲。
艶やかな青みの掛かった銀髪をしており　瞳の色は、紅色。
顔色は、いつも顔に掛かる前髪によって　滅多にお目に掛かれない。

イリア

元は、流れの傭兵で　現在は、ユウリイの第二騎士。
ひょうひょうとした口調で　主に対しても　口が軽いが　そのも

たらず情報は、役立つ。

朱色の髪を短髪にしており 瞳の色は、黒。

王の命により <影>という秘密裏の特殊部隊の長を務めている。

リン

宰相の妻で ミリアム付きの侍女。

おっとりとした女性で 息子と夫に献身的。

侍女に扮して王妃を守る特殊部隊の隊員。

元は、親族が王族を狙った刺客だった為 家族を失った存在。

その後は、王族を守る為だけに 武術を習い 王妃直属の駒になった。

見事な金髪の持ち主で 瞳の色は、藍。

シャーリー

リンとは、従姉妹同士のミリアム付きの侍女。

人をからかう事は、多いが ごく稀に 事実も話す。

侍女に扮して王妃を守る特殊部隊の隊員。

元は、親族が王族を狙った刺客だった為 家族を失った存在。

その後は、王族を守る為だけに 武術を習い 王妃直属の駒になった。

美しいプラチナブロンドの髪で 瞳の色は、藍。

ミイナ

ミリアム付きの侍女だが 現在は、妊娠中の為 自宅療養中。

表情は、掴めないが 夫には、メロメロらしい。

侍女に扮して王妃を守る特殊部隊の隊員。

元は、親族が王族を狙った刺客だった為 家族を失った存在。

その後は、王族を守る為だけに 武術を習い 王妃直属の駒になった。

愛らしい栗毛の巻き毛の持ち主で 瞳の色は、黄緑。

ルチア

王宮の働き手をまとめる侍女頭。

元は、ユウリイの母親付きの侍女だったらしく 王妃達の教育係でもある。

特殊部隊の存在は、知らない。

白髪で 髪の毛は、いつ何時に見ても 綺麗にセットされ 瞳の色は、濃い灰色。

アナスタシア

王宮付きの侍女。

実は、ルチアの姪っ子に当たる。

両親は、先の戦争で犠牲となってしまったらしい。

赤毛を縦ロールにしており 瞳の色は、大陸では珍しい黒。

シャルロット

<ローズ>が召し上げられる前後に入ってきた侍女。

嗜好きで いつも王宮内を走り回っている。

馬鹿力で 者を何でも破壊してしまうが 黙っていれば美少女。

実は、元・刺客で任務失敗したが 敵の情報を話す事を条件に命を助けられた。

現在は、イリアの<影>として 王宮の不穏を取り除いている。
艶のある飴色の髪色で 瞳の色は、黒。

コルネオ

宰相とリーンの息子。

少し消極的な性格だが 耳がいい。
セレディー皇子を天敵としている。

母の髪色と瞳の色を受け継いで とても愛らしい男の子。

アーロン

ミリアムの兄。

国を救う為に 自らを犠牲にした英雄。

<ローズ>と似ている。

セレディー皇子

ある事情から 幾度に渡って 滞在している悪戯好きな皇子。

毎度 様々な嫌がらせをするので 王宮の皆からは、避けられている。

<ローズ>に心を開いていく。

実は、とても思慮深く 異母兄弟であるガルディー皇子が、王位につくべきだと考えているらしい。

父王の真名を 意図せずに母から受け継いだ事で 刺客に狙われる身。

綺麗な金髪に 碧眼の持ち主。

トッド

セレディー皇子付きの騎士。

元は、イリアと同じくこの国に流れてきた傭兵だったが 国の危機に姿を消していた。

その後は、どういう経緯なのか語らず セレディー皇子の生母である前・王妃の配慮により 国民として受け入れられ その後は、皇子の騎士となったらしい。

腰に掛かる銀髪で キリリとした眼差しに 柘榴色の瞳を持つ。

始まり

この国は、1度他国に滅ぼされようとした

誰の目にも それは、明らかなことであり 避けられないと思われた

誰もが認める王は、侵略者の手に討たれ 誰もが慕う王妃は、生きていくのも辛い日々を送るだろうと

けれど 奇跡は、起こった

それは、偶然の出来事だったのだろうか？

この時 始めて戦争に身を投じていた皇子に忠誠を誓っていた若き騎士が、自らを犠牲にした

我が身を国に眠りし土地が身を差し出し 国は救われた

国は、その騎士の犠牲を糧にして 残った力と新たに得た力を振り翳し 敵国を滅ぼした

自らを犠牲にした騎士の血筋は、その栄誉を讃えた

そして 月日は、流れる。

幼かった皇子は、成長し 死んだ騎士の妹を妃に迎えた。

日常

侍女としての1日は、主^{あるじ}よりも先に起床し、すぐにその支度を整えられるように準備万端にすることからだった。

どんな要望に応えられるよう、衣服も宝石もアクセサリも……。

全てを用意しなければならぬ。

といつても、今仕えているお方は、ご自分をあまり着飾ろうとしないが。

けれど、何も身に付けなくとも、その美しさは、誰もが溜息をつくと思う。

それは、他の侍女仲間も同意見。

当の本人にそれを言えば、大笑いしてしまわれるだろうけれどね？

}

}

}

}

「ミリアム様……朝ですよ？
起きてください」

主であるミリアムを起こす役割は、いつの間にか この侍女の仕事
になっていた。

「ミリアム様 早く起きてください」

その言葉に ベットの中に蹲っている影は、少しずつ起き上がって
くる。

「……………<ローズ>……………もう少し寝かせて頂戴？」

陛下は……………もう、起きてしまったのかしら？」

童顔なお顔を布団から少し出して ミリアムは、伸びをした。

「陛下でしたら 30分ほど前に部屋を後になさいました。

仲が良ろしいことは、国にとっても素晴らしいですが もう少し
体力をつけましょうね？」

<ローズ>は、ニツコリと微笑んで 主の首元を指差す。

扉の前には、顔を真っ赤にさせている侍女2人が。

ミリアムは、首を傾げ フラフラと壁にある鏡に姿を晒すと 思
わず悲鳴を上げてしまう。

「陛下……………前に止めて欲しいと申し上げたのにッ！

普段は、弱気なくせに……………！！

パニックになっている主に <ローズ>は、微笑ましそうに見つめ
ている。

これが、いつもの1日の日常の第一歩。

日常（後書き）

<ローズ>とは、誰でしょうね？

お茶会1（前書き）

ここで やつと記憶喪失の侍女の存在がちゃんと明らかに

名前の由来は、彼女の胸の痣です。

お茶会 1

「<ローズ>……………この頃 王宮にも慣れてきたかしら？」

貴女がわたくしの侍女になってから 大分経ったけれど」

ミリアムは、紅茶を啜りながら 全員分のコップに飲み物を注いでいる少女に声を掛けた。

皆は、少し大きめのテーブルに腰を下ろし 侍女達もこの時ばかりは、少し質素な椅子を持参して このお茶会に参加している。

毎回お茶を披露するホステスは、前もって自らのセンスを生かし 客に安らぎを与えること。

これが、このお茶会の絶対のルールだ。

今日のホステス役は、侍女の中で新米の黒髪の少女；<ローズ>。

彼女は、数週間前に突如現れ 意識を数週間も戻らず 目が覚めた時には、全ての記憶を失ってしまっていた。

治療に当たった医者の話によれば 胸の心臓のある部位には薔薇を象った痣が。

名前が無ければ 呼ぶのも大変だということで 今現在 <ローズ>と呼ばれている。

侍女として他の使用人達に紹介された時は、色々と疑われることも多かったが 今では、他の皆から可愛がられる存在に。

それは、王宮で働く最年少だからかもしれない。

記憶を失っている為に 実年齢は、定かではないにしても 見た目は、13・4歳なのだから。

「大丈夫です、ミリアム様ッ！」

最初は、失敗も多かったかもしれませんが この頃は、ルチアさんに叱られるのも減ってきましたんですよ？

以前は、10分間に4・5回失敗していましたけど 今は、1時間に2・3回くらいに減りましたから」

「あら 油断は、大敵よ？」

わたくし何か……子供の頃から　今と変わらないくらい説教されてばかりだったのだから。

特に　お兄様と一緒に街に押し入ってきた盗賊を追っ払ったのは、拙かったかもしれないけれどね？」

それを聞いて　<ローズ>は、驚いたように目を大きく見開く。

「ミリアム様は、本当に子供の頃から今と同じだったんですね？」

わたしが侍女になる前にも　他の方々の反対を押し切って　自ら軍を引いて、討伐なさったそうじゃありませんか」

その発言に　聞いている皆は、苦笑気味。

侍女仲間達は、どうしたらいいのかわかっていないが　王とそのお付の面々は、完全に完全に笑ってしまっていた。

ただ笑っていないのは、言われた当の本人だけ。

「<ローズ>……貴女、言うようになったわね？」

少し拗ねた顔は、年上なのに　可愛いと思ってしまうほど。

「ミリアム様に侍女にして頂いて 心より感謝しております。

それから 陛下の心遣いにも。

お2人のお陰で わたしは、今の日々がとても充実しているのです」

満面の笑みを浮かべて話す<ローズ>に 王と王妃は、嬉しそうに顔を見合わせる。

「それなら いいのだけど……………」？

シャーリーに聞いたけれど 宰相に嫌がらせされたんでしょう？」「

ミリアムの言葉に 陛下の向かい側に座っている眼鏡を掛けた長身の男が、咳払いを1つ。

彼は、陛下の懐剣とも呼ぶべき存在らしい。

名前は、宰相の名を引き継いだ時点で 後継ぎとなるべき生まれたばかりの息子に与えたとか。

滅多に笑わない方だから ちょっと睨みを効かされると 陛下でも言葉を失ってしまうほど。

ただ奥さんで ミリアム様の侍女をしている愛らしいリンさんと
幼少の頃から知っているルチアさんには、効かないらしいけど。

後 陛下の騎士様も 待つたく気にせずに、スルーするはず。

「滅相も在りませんッ！

宰相閣下は、迷いそうになっていたわたしを、案内して下さったんですよ。

その後は、ご子息のネオ坊ちゃまのお相手を休憩時間にさせて頂いたんです」

<ローズ>は、嬉しそうに 最後に自分用の紅茶を飲む。

「本当に助かっているんですよ？

>ローズ<は、働き者だし……………うちの子供達ととっても仲が良いです。

悪戯三昧のネオが、あんなにも懐いているだなんて……………素晴らしい事です」

ちやつかり宰相閣下の隣りに座って和んでいるのは、奥方のリーンさん。

外見は、とっても可愛らしいお人形さんだけど 怒るとルチアさんに冷や汗を出させてしまうらしい。

>ローズくが王宮で捕まっていた頃は、産後休暇で暇を貰っていたらしく 少しして復帰した。

まだ仕事に慣れずに 泣いてばかりいた>ローズくの良き相談相手でもある。

その隣りに座っているのは、シャーリーさん。

最初2人が並んだ時は、双子かと思っていたけれど シャーリーさんとリーンさんは、従姉妹同士らしい。

プラチナブロンドのシャーリーと違って リーンは、綺麗な金髪の持ち主。

「侍女として慣れてきた事は、良いかもしれませんが 記憶の方は、全く戻らないの?」

シャーリーは、優雅に紅茶を飲むと テーブルの上に静かに置く。

その言葉に >ローズ<は、申し訳なさそうに首を振った。

「ナディア様にも 顔を合わせますと 同じように聞かれるんですけどね？」

それに わたしとしては、気になることがあって……………」

その発言に 陛下に剣の誓いを立てている女騎士のコーネリア様は、眉間に皺を寄せる。

「そつえば殿下がおっしゃられていましたね？」

痣が、日に日に濃くなってきていると……………」

その話を聞いて ミリアムも陛下も、心配そうな表情になった。

「大丈夫ですよッ！」

痣が濃くなるのは、ちょっと気になりますけど……………体調が悪くなっているわけでもないんですから」

>ローズ<は、自身あり気に胸を思い切り叩く。

けれど　あまり強く叩きすぎたのか　思い切り咽込んだ。

お茶会2（前書き）

会話の中で 王と王妃の周りの人々の説明入ります。

お茶会2

「前から思っておりましたが　＜ローズ＞を見ていると……………あいつを思い出すんです。」

何ていうか　性格ですかね？」

宰相閣下は、突然　呟いた。

その発言に　皆が、ハツとしたように　顔を見合わせる。

「確かに　似ているかもしれませんか？

宰相のあしらい方も……………」

「ミリアムの話していた通り　瞳の色もそうだからな？」

声と同時に　ミリアムと陛下が、顔を覗き込んできていた。

2人の美しい顔が、至近距離にあるので　顔を真っ赤にさせてしまふ。

その反応が、楽しいのか　王妃は、楽しそう”可愛い”！”に思
い切り抱きしめてくる。

<ローズ>は、あまりに突然のことなので　窒息しそうに。

陛下は、さすがにそれは拙いと思い　ただ羨ましそうに見つめてい
るだけ。

侍女頭のルチアは、その行動に深く溜息をついてしまっているけれ
ど…………。

「ユウリィー…………羨ましいんでしょう？」

子供の頃は、可愛い物を抱きしめるのが、趣味だったんですもの」

コーネリアは、宰相の双子の妹で　同じ顔なのに　性格は、まる
で正反対。

主に対する発言では、許されない事かもしれないけれど　これは、
やはり幼い頃からの友人だからかもしれない。

「リア…………俺は、お前の主だぞ？」

しかも 君主に対して その言い方は……………」

「お茶会の最中は、主従関係なく接するように と言い出したのは、あなたではありませんでしたか？」

その言葉に 王は、言葉を詰まらせてしまっている。

「そうでしたねぇ？」

俺達は、元より 陛下をお守りする騎士として、接するつもりだったのに それに対して、不機嫌になってしまったんですから。

俺も 最初は、こんな我侭で良いのか？！って思いましたけど……
…今は、慣れました」

ケタケタと大爆笑しているのは、第二騎士のイリア様。

この国では、珍しい髪の色で 元々は、流れの剣客だったところ
その剣術の実力を認められて、騎士の称号を与えられたとか。

奥方のミイナさんは、現在妊娠中で ミリアム様付きの侍女の仕事を
お休みしているらしい。

子供が生まれて、少し時間を置いてから 復帰する事が決まっている。

王宮には、子供がいても安心して働けるよう 子供の面倒を見る空間が設けられていた。

そこでは、戦争などで 子供を亡くしたり 親を無くし、働きようがない子供達が役割を果たしているそうだ。

隣国や他国からは、非道な手段で戦争に勝利していると畏怖されているらしいけれど <ローズ>から見ると とても素晴らしい国だと思う。

全く記憶がないのだから 他がどんなものかは、全くわからない。

けれど 人として ここにいる人々は、素晴らしかった。

特に このお茶会に集まっている面々は、本当に王と王妃に信頼された人ばかり。

だからこそ <ローズ>にとっては、すごく居心地が悪かった。

自分が、この場において良いのかわからないのだから。

「どうかしたの、<ローズ>？」

さつきから 黙ってしまっているようだけれど

リーンの言葉に <ローズ>は、ハツとしたように 顔を上げる。

その声に 他の皆も、心配そうにしてくれているらしい。

「すいません、ちょっと考え事をしていました。

わたし何かが、お茶会に参加していてもいいのかと………」

その発言に ミリアムが”そんな事ないわ?!”と、声を張り上げた。

「わたくし 貴女の事大好きよ？」

初めて会った時にも、言っただけだ 貴女の声は、亡くなったお母様の歌声にソックリなの。

それに 貴女の右の瞳の色が、お兄様と瓜二つなのよ………」

ミリアムの顔は、よく見えない。

最初に抱きしめられたままの状態なのだから。

他の人々に視線を向けてみると 何だか、哀しそうな表情になっている。

宰相閣下が、最初に自分と重ねていたのも 実は、ミリアム様の兄上だとか。

そういえば 前に、他の下働きの子達の噂話を小耳に挟んだ事があった。

王妃様の兄君は、国の為に犠牲になった英雄らしいと。

この方々は、今の自分達が平和に暮らしていることで その方に罪悪感を抱いているのだろうか？

お茶会3

「あら………… お茶会をしていると伺って 来たのに。

何だか 重苦しい空気ですね？」

その声に 驚いて振り返ってみると そこには、陛下と同じ赤毛の混じった金髪を肩の辺りで切り揃えた女性が。

彼女は、陛下の妹君のナディア王妹殿下。

それは、顔立ちと髪の色で一目瞭然だろう。

ナディア様は、数々あった縁談を全て断り 医術の道へと足を踏み入れた異例の王族。

けれど その腕前は、確かにあるはず。

特に 王宮で働いている女性陣には、とても素晴らしい存在でもある。

いくら医者といえども 男性医師に診断してもらうのは、気が引

けてしまつのだから。

<ローズ>も 胸にある痣の経過を診察してもらった時 男に見られるのは、恥ずかしくて堪らない。

「ナディア様……………今日の診察は、終わったのですか？」

<ローズ>は、今日のお茶会のホステスである立場を思い出して
急ぎ、コップと紅茶を用意する為に立ち上がった。

「珍しいな、ナディア。

ワーカーホリック
「仕事中毒のお前が、お茶会に参加するだなんて」

ユウリイは、珍しい物を見たともいうように 目をパチクリさせている。

その反応は、騎士達と宰相も同じだろう。

「あら ご存知ない？」

ナディアは、<ローズ>がホステスの時だけ 毎回、お茶会に参加しているのよ？」

ミリアムは、楽しそうに微笑む。

侍女達は、王の妹であるナディアの出現に　全く動転することなく
優雅に席を空けた。

「毎回　＜ローズ＞がお茶会のホステスになる時は、陛下達　お仕事
事でお越しになられませんでしたから。

確か　今回が初めてでは？」

ルチアの言葉に　陛下方は、納得したように　顔を見合わせている。

「驚いたな？」

まあ　ナディア様自身が、＜ローズ＞の主治医になる事を宣言な
さったから　何かと思い入れがあるとは思っていましたが………
さ？

だって、ソックリじゃん」

イリアは、感心したように　顎を摩った。

騎士の一言に その場が凍りつく。

皆のそんな反応に <ローズ>は、疑問を覚える。

けれど その質問をする前に 彼は、宰相に蹴りを入れられてしまっていた。

今は、一線から退いているけれど 剣術も体術も相当の腕前らしいから イリス様は、相当辛そうだ。

その一撃が、氷河のような氷に輝^{ひび}を入れたらしい。

「ナディア様は、お砂糖が2個でしたね？」

<ローズ>が、そう言つと 彼女は”ええ”と、頷く。

そして、丁寧な手つきでコップを差し出す。

「ありがとう。」

……………うん、やっぱり <ローズ>の入れる紅茶は、絶妙ね？

仕事の疲れが取れる」

ニツコリと微笑むナディアに　＜ローズ＞も自然と笑みが浮かぶ。

「ナディア……………本当に疲れているのね？」

何か問題でも　出てきているの？」

ミリアムは、神妙な表情を浮かべて　隣に座っている義妹の顔を覗き込む。

ルチアは、そんな王妃の行動に注意しかけたが　確かに顔色が悪いと気が付いていたのか、思い留まる。

「ああゝ例の国から　使者が来たでしょゝ？

内部紛争が起きるかもしれないから　皇子を保護して欲しいって」

ナディアは、そう言うと　深く溜息をついた。

その様子を見て　陛下や宰相達も、同情するような顔になっている。

ミリアムや王妃も、何か思い当たる事があるのか　溜息。

そんな皆の反応に　＜ローズ＞は、１人だけ首を傾げるしかない。

「仕方がないだろう、ナディア。

皇子は、お前の事を本当に慕っているんだから」

ユウリィ陛下は、苦笑して　妹殿下の背中を優しく叩く。

「わかっています、そりゃあもうッ！

けれど　限度ってものがあることを、兄上達にもわかって頂きたい」

少し膨れた顔は、やはり陛下の愛された妹だと思う。

提案

「ナディア様？」

その異国の皇子様のお世話が、そんなに苦痛なのなら わたしが代わりましょうか？」

<ローズ>は、あまりに気の毒なような気がしてきて 提案した。

その発言に その場にいる面々は、呆氣に取られてしまったらしい。

先ほどまで 心から嘆いているようにしか見えなかった女性も、目をパチクリ。

「<ローズ>……………貴女、自分が何を言っているのかわかっています？」

その皇子が、どんな性格をしているのか 知らないでしょう？」「

「話だけは、伺った事があります。

御年10歳の聡明な皇子なのでしょう？」

とても礼儀正しいと小耳に挟みましたけど……………」

<ローズ>の仕入れてきた内容に 皆は、困り顔。

それは、違った情報だったのだろうか？

「うーん……そっちの情報は、こっちが預かる事になっている同じ年の皇子。」

今の内容の皇子は、側室の息子で 問題の皇子は、正妃の息子」

「その国の王妃様は、ミリアム様とご友人なんですよ。」

ですから 交流は、続いていたのですが……その方が、2年程前に病で亡くなられてしまったんです。

王妃様が亡くなられた事で その国の王は、側室の方に王妃の位をお与えになりました。

これにより 王位継承第1位の皇子は、何の後ろ盾もなくなったに等しくなったそうです。

皇子の母君の実家は、既に皇子の従兄が後を引き継いでいたそうですが 若輩者ですし。

ですから 時より、こちらに滞在する事がおりました……」

ルチアは、頭痛を覚えているかのように 説明してくれた。

「もしかして 新しい王妃様に、苛め倒されているんですか？
だから、この国に逃げて……………」

<ローズ>の言葉に 皆は、目を泳がせてしまう。

「いえ その逆です。」

押し付けられたんですよッ！」

驚いて、振り返ってみると 宰相が、真剣な顔になっていた。

小刻みに震えているのは、怒りによるものなのかもしれない。

「宰相閣下が、一番の犠牲者でしたからねえ？」

前回お越しになった時は、一番凄かった……………」

イリアが、そう呟くと 宰相閣下の鉄拳が、炸裂した。

「主人もそうですけど……うちの息子は、子分扱いされていますね？」

あの子……皇子が滞在中、食欲が減ってしまうんです」

奥方の悩みの種に 困り果ててしまっているらしい。

「ミーナも 生まれたばかりの子供が、同じ扱いを受けるのではないかと不安がっていますし」

イリアも さすがに、不安が込み上げてきたのか 肩を竦めてしまっている

「我々侍女も、悪戯の標的にされることもありました。

ルチアさんでも 何度も雷を落とされましたけど 意味が為さず。

ただナディア様に対しては、随分と紳士的なんですよね？」

だから 毎年、皇子のお目付け役になってしまわれて」

リーンは、溜息をつきながら テーブルに項垂れている王妹殿下に視線を注ぐ。

話を振られたナディアは、機嫌が悪い。

「あの腹黒い性格が、直っているのならば 綺麗な顔をした異国の皇子なのに……ッ！」

前回の犠牲者は、宰相だけじゃないんだから!!」

「ああ………そういえば、折角用意していた薬剤を全部粉碎されたのよね？」

しかも それによって、皇子自身も薬の影響を受けてしまって暗殺容疑を掛けられて、一晩だけ牢屋に入れられてしまった」

ミリアムの言葉に 王は、その時の事を思い出したのか”あの時は、すまなかった”と、頭を下げる。

兄の言葉に 妹は、首を振った。

「気になさらないで。

アレは、立場上………仕方のない判断だった事は、重々承知しているわ？」

皇子の騎士が、私を斬り捨てようとしていたところを 何とか牢獄

行きで収めてくださったのだし。

それで その限られた時間の間で リアとイリアが、皇子の悪戯による結果だという証拠を見つけてくれたし」

そう言いながら ナディアは、コーネリアとイリアに視線を向ける。

視線を受けて 2人の騎士は、急いで地面に膝を付いて 頭を下げたらしい。

「ですから ナディア様？

わたしが、その皇子様のお世話を代わります」

<ローズ>は、最初よりも自信満々に声を張り上げた。

一同は、先ほどの会話を聞いても 全く意思が揺るいでいない侍女に 呆気だ。

「本当にいいの？」

王妃の問いかけに <ローズ>は、満面の笑み。

「ならば 誓いを立てましょうか？」

提案（後書き）

ちよつと、企みがあるくローズ>です。

訪問に向けて（前書き）

訪問に向けて

王宮は、緊張に包み込まれていた。

どんなに厄介な相手でも 受け入れる。

それが、先帝夫婦のルールであった為 その跡継ぎであるユウリ
イ王も従っているらしい。

勿論 陛下に忠誠を誓っている王宮の人々も。

毎回毎回、悪戯されてしまうので それに対する対処も、嚴重に
なっているのか。

旗から見れば 条約を結ぶ前の敵国が、訪問するに当たる準備を行
っているかのよう。

そこまで念入りにするべきなのか……と、リーンに聞いてみたところ
これだけでも足りないと言われた。

みんなは、どうやら 自分が考えた提案が成功するとは、信じら

れないようだ。

）
）
）
）

「王宮内では、もう準備でてんでこ舞いです。

ルチアさんは、わたしを含めた侍女のみんなを懸命に挨拶教育をやり直していますし。

宰相閣下は、絶対に駄目にはいけない書類などに保護の呪文などを施しているんですよ？

それに 万が一の事を考えて お子様方のお部屋には、特殊な印を施して 部外者には、その部屋を認識できないようにすることが決定したそうです。

ネルってば それを聞いて 本当にホッとしていたんですよ？

本当にその皇子様の事を、恐れているようでした」

「<ローズ>？

今からでも遅くないわ？

皇子のお世話役は、私が……………「大丈夫ですよ」

「先日のお茶会でも申し上げましたでしょう？

話を聞いている限り　その皇子様は、お寂しいんでしょうね？

だから　皆さんに構って欲しいんですよ」

<ローズ>は、丸椅子に座って　ニツコリと微笑んだ。

そんな少女の言葉に　目の前に座っている女性は、不安そうな顔になっていた。

今のナディアは、この国の王妹殿下のナディア姫ではなく　王専属の女医として　存在している。

王位継承の証を返上しても　その美しさに惹かれる男性は、後を絶たないらしい。

まあ　それは、王に剣の誓いを行ったコーネリア嬢も同じらしいけれど。

「まあ　貴女の事を信用していないわけじゃないわ？

だけど　心配なのよ。

特に………皇子と一緒にくっついてくる騎士が、特に　血の気が多

くて」

「ああ ナディア様は、危うくその方に斬り捨てられるところだったんですよね？」

それに ミリアム様に窺ったんですけど その方といっつも喧嘩なさっているとか」

<ローズ>の言葉に ナディアは、険しい顔。

「あの男は、昔からそうなんですよ。」

それで この国が危機に瀕したら 真っ先に他国へ逃げ出してしまった。

いくら 流れてきた傭兵だからって たった1人の主に忠誠を誓う騎士じゃないからって……あの男は、子の国を見捨てたの。

なのに 次に現れた時は、あの問題皇子の騎士様……。

初めての訪問の時、みんな言葉が出なかったわ？

同じように流れてきたのに ちゃんとこの国に留まっているイリアとは、大違い」

その話を聞いて <ローズ>は、黙ったまま。

何を言っても 意味がないような気がしたから。

そして 少し時間を置いてから <ローズ>は、ここぞつとばかりに満面の笑みを浮かべた。

「皇子様のお世話役もその方への配慮も わたしにお任せ下さい。
粗相のないよう 務めさせて頂きますから」

そして 皇子が訪問する日を迎えた。

訪問1（前書き）

問題皇子と厄介騎士の登場です。

訪問 1

皇子一行が到着したのは、提示された時間よりも30分ほど早かった。

その事には、王宮中が大騒ぎ。

少し時間が空いたと油断した矢先に 皇子が到着したという連絡が門番の放った使役により発覚したのだから。

ちようどお茶会を短縮版で始めようとしていた<ローズ>達も、大慌て。

特に お世話役が変更されたという連絡は、3日前に文を送って昨日、承諾の返事が着たばかりなのだから <ローズ>は、王と王妃や他の侍女に背中を押されて 真っ先に門まで駆け出した。

皇子が王や王妃と謁見するのは、王の間と決まっているらしい。

それ以外の場で会うという行為は、少し特例で 酷い場合は、暗殺目的と疑われても仕方がないとか。

<ローズ>は、いつもの侍女服と違って　少し礼服に近いワンピースに身を包んでいる。

皇子に対して　新米の侍女が世話役になったと知られれば　友好問題に発展する可能性があるかららしい。

なので　皇子滞在中の<ローズ>の身分は、礼儀見習い中の貴族の令嬢。

つまり　お客様扱いをされることが、王宮内での決定になっていた。

本当に　皇子には、色々と迷惑を掛けられたのか　死刑宣告までされたはずの新参者の侍女をお嬢様扱いする事は、苦痛にも思わならしい。

逆に　可愛いとすれ違う度に叫ばれるので　こっちが恥ずかしくなってしまう。

そうこうしている内に　<ローズ>は、王宮の門に辿り着いた。

門番は、何か困ったように　長身の男を制しているらしい。

<ローズ>は、不思議そうに背伸びする。

門番のハンスさんは、困ったように　その男の人を止めていた。

少し砕けた口調だから　もしかしたら　知り合いなのかもしれない。

彼は、陛下の第二騎士のイリアさんと同じ頃に流れてきた傭兵らしいけれど……。

皇子様が、どこかで待っているのに　無様な姿を見せるわけにはいかないのだろう。

長身の男の人は、腰まで伸びる銀髪を1つに纏めて　風に揺らいている。

「お前　そんなところで何をしている？」

突然声を掛けられて　<ローズ>は、思わず小さな悲鳴を上げて飛び上がった。しまった。

門番も、その声に気が付いて　駆け寄ってきたらしい。

勿論 長身の男の人と一緒に。

「お前……もしかして、僕のお世話役の女か？」

呆気に取られていると 先ほど声を掛けてきた声が、また聞こえてくる。

けれど 辺りを見回してみても どこにもその声の元がない。

すると 門番が、顔を真っ青にさせている姿と長身の男の無表情の中の驚愕が見て取れた。

「下だ」

不機嫌そうな声にハツとして <ローズ>は、地面の方に目を向ける。

すると 視線の先には、ふんぞり返っている礼服に身を包んだ少年が。

「ふんッ！」

まさか こんな失礼なガキが、僕の世話係になるだなんて この
国も堕ちたものだな？」

あまりにも毒舌に <ローズ>は、目をパチクリ。

見た目は、金髪で蒼い目の天使のような姿なのに ここまで口が
悪いだなんて…………。

「通りで 皆さんが、嫌がるわけだ。

こんなに性格が悪いんじゃ みんな迷惑だろうから」

口に出してしまってから <ローズ>は、ハッとして 口を押さ
えた。

けれど 目の前には、顔を引き攣らせている皇子と呆気に取られ
ている門番と目を細めた長身の男性。

「お前…………この国の者じゃないだろう。」

この国では、相手に対しての礼儀を重んじている。

なのに　お前は、堂々と侮辱してくれた」

どこか殺気の籠った口調に　　<ローズ>は、頭の中で次の言葉を
探す。

言い訳を考えるべきではない。

多分……この皇子に必要なのは、そんな見え透いた嘘ではないは
ずだから。

「皇子様は、口下手ですね？」

悪戯すること　で　皆さんが、自分を見てくれるようになさりたいの
でしょう？

そんな事よりも　もっと簡単なことがあるのですが　一緒に実行
してみませんか？」

ニッコリとそう言うと　皇子は、呆然と口を半分だけ開けたまま。

「勿論……えつと皇子の騎士様ですよ？」

貴方にもご協力を仰ぎたいのですが……宜しいでしょうか？」

銀髪の男性も 急に話を振られて 呆気に取られてしまっているらしい。

ハンスは、何をやるつもりなのか気が付いていないようだが 口を開きかける。

けれど その前に満面の笑みを向けられてしまい 直立不動。

「ハンスさん……皆さんに、王の間に向かうのが少し遅れると使役を送ってもらえますか？」

今から話す内容をそのまま……」

）
）
）
）

「わたくしは、やっぱり心配だわ？」

<ローズ>に皇子の世話役は、重すぎると思うの」

ミリアムは、不安そうに溜息をついた。

王妃の言葉に ユウリイも、心配そうな顔になっている。

「あの子は、少し不思議な空気がありますからね？」

もしかしたら 皇子の事も何とかするのでは?」

コーネリアは、ニッコリと微笑んで 言う。

「ですね?」

もしかしたら 堅物のトツドも砕けるかもしれないだろう?

意外に惚れちゃったりして?」

イリアは、ニヤニヤしながら 呟いた。

「お前は、ナディア様のお心を知っていても そんなふざけた風に 言えるのか?

<ローズ>が現れた事で 少しは、落ち着きを取り戻してきたというのに」

宰相の冷たい声が、放たれる。

その言葉に 第二騎士は、”わかっているさ”と、肩を竦めてしまう。

「ですが ミリアム様?

<ローズ>ですが　あの子は、どこぞのお嬢様なのは、間違いないと思いますよ？

遊び心は、ちょっと問題かもしれませんけれどね？」

ルチアは、静かに言った。

「皇子の世話役に当たって　他の侍女達と同じように礼儀作法の教育を行ったのですが　ちゃんと身に付いていましたので。

あれだけ身に付いていましたら　他国に使者の侍女として同行しても　問題ありません」

「ルチアが、そこまで言うんなら　相当なんだろうね？

<ローズ>は、記憶を一切失っていて　最初こそは、怪しまれることもあるかもしれないけど　今では、随分と可愛がられているみたいだから」

王の言葉に　臣下達も頷き合う。

ふと　そこへ　使役らしき使い魔が王の間に飛び込んできた。

「あら　それは、ハンスの使い魔ね？」

「一体　なんて書いてあるの？」

使役の持ってきた手紙を読んで　頭を抱えてしまっている夫に
王妃は、首を傾げる。

「皇子とトッドと少し遊んでから　王の間に入るそうだ」

その内容に　その場にいる面々は、目を大きく見開いてしまう。

「遊ぶって……あのトッドも一緒に？！」

皇子なら未だしも……絶対にはりえませんってッ！」

イリアは、大袈裟に大声で叫びながら　首を振った。

コーネリアも　目をパチクリさせながら　顔を引き攣らせている
双子の兄に視線を注ぐ。

「だけど　もしかして、トッドも<ローズ>がお兄様に似ている
と実感したのなら　ありえない話じゃないと思うのだけねど？」

だって 親友だったのですもの」

ミリアムは、唸りながら 首を傾げる。

「というより 挨拶を後回しにして 皇子と遊ぶわけですか……」

ルチアは、深く溜息をついた。

訪問2

「おい……………一体、何を考えている？」

問題皇子事 セレディー皇子は、眉間に皺を寄せて 呟いた。

騎士のトッドさんは、あまり害がないと判断してくれたのか 無
言で付いてきているらしい。

「何 って、最初に言いましたよ？」

皆さんに悪戯するような回りくどいやり方何かしなくても 仲良くなる方法があると」

<ローズ>は、楽しそうに 微笑んでいる。

けれど その瞳には、相手に拒否権を与えない強さがあつた。

「お前……………本当に何者なんだよ…」。

普通 他国への訪問の始まりは、王の間で王と王妃の謁見から始
まって 挨拶を交わすものなんだぞ？」

セレディーは、もう諦めてしまったらしい。

<ローズ>は、クスクスと笑って ” お前じゃありません、<ローズ>です” と、微笑む。

今度は、先ほどのようなものではなく 心から笑っている。

「<ローズ>ね？」

確かに棘がありそうだ。

華の美しさとは、違って……………」

皇子の呟きに 少女は、納得がいかないかのように 膨れっ面になった。

「別にそういう意味で名付けられたわけじゃありません。

名前を呼ぶのに <名無しさん>じゃ面倒だから……………って」

その呟きに 皇子と騎士様は、驚いた顔になる。

「<名無し>だって?!

名前は、普通　親に貰うだろう?

厄介者扱いされている僕だって　父上に名前を頂いたっていうのに
……………」

「うゝん…………わたし　実は、記憶喪失なんです。

それで　怪しいって、実を言うと　死刑宣告を受けたんですよ?
ね?」

今度の発言にも　絶句するお2人。

「でも　ミリアム様…………王妃様の行動とその話をして下さった陛下
下のご配慮で、ここまで生き延びたんです。

<ローズ>という名前も　ミリアム様が、命名してくださったんですよ?
すよ?

王宮の皆さんも　色々なことを教えてくださいます」

「だから　厄介な皇子の世話役を買って出たのか?」

少し自虐気味な言葉に　＜ローズ＞は、”はい”と、正直に頷いた。

あまりに清々しく答えたので　セレディー皇子は、吹き出してしまっているし　トッドさんも、肩が震えてしまっている。

もしかしたら　怒るのを通り越して　笑いが込み上げてきたのかも。

「この王宮で暮らすようになってから　まだ間もないわたしですけど　皆さんが、とってもいい人だってこと　痛いほどわかるんです。

けれど　皇子様方は、コミュニケーションの取り方がわからないというだけの理由で　引っ掻き回している。

だから　こんなわたしにも出来ることを考えてみた結果　互いの誤解を取り除く事なんじゃないか、って考えたんです」

自信満々に微笑む様子に　2人は、顔を見合わせた。

「お2人は、言葉で表現する事が苦手なんじゃないですか？

皇子様は、ご自分に目を向けて欲しいから　何かと悪戯をする。

トッドさんの場合は、えっと……これは、第三者の方から聞いた

為 誤解もあるかもしれないんですけどね？

この国が危機に瀕した時に 逃亡してしまったっていう 罪悪感があるから 他人行儀になってしまつて 厳しく受け取られてしまつんじゃないかつて」

その言葉に セレディーとトッドは、何も答えない。

「だから わたしが、橋渡しをするんです。

結局 頑張るのは、貴方方ですから。

恥ずかしいから………何て、馬鹿な言い訳をしないで下さいね？

拒否権は、ありませんから。

今のわたしの発言が気に入らなかったのなら すぐにおっしゃって下さい。

その代わり 一生、この国で和解することが出来ないという事を覚悟して頂かないといけませんけど」

<ローズ>は、何も反論が見られないのを確認して ゆっくりと歩き出した。

2人は、その後を無言で追いかけてくる。

というより 発言権を与えたのに あまりの言い方に言葉が見つからないのかもしれない。

<ローズ>は、これから実行する計画を頭の中で見直しながらスキップ調になりながら 歩んでいく。

訪問3（前書き）

今回は、会話だけでいってみましょう！

訪問3

「<ローズ>……………これは、何だ？」

「だから ユーモア溢れるニューバージョンのセレディール皇子様です。」

「とっても お似合いですよ？」

「顔立ちも、しつかりなさっていますから 何でもお似合いですから」

「おい……………ッ！」

「勝手に塗り付けているんだよ……！」

「何……………って？」

「勿論 決まっているじゃないですか。」

「ここまでしたのに これをしなければ 何の意味もありません」

「意味も何も 屈辱的だ……………」

「大丈夫です、お似合いですもの。」

記念写真 お撮りになれますか？」

「なッ！」

そんなの撮る訳無いだろう?!

って……………何、取り出してきているんだッ!

こっちに向けるんじゃない!!」

「だから 記念ですよ。」

今は、嫌かもしれませんが 後から懐かしくなります。

多分 こういう事が出来るのは、今のうちですから」

「何が言いたいんだ?」

「あら……………褒めているんですよ?」

そんな顔したら 台無しになってしまいます」

「褒められても 全然嬉しくないッ！

っていうか トッドは、どうしたんだよー！

僕が、こんな目に遭っているっていうのに なんで、助けに来ない？」

「何言っているんですか……ここにいるじゃないですか」

「え？

……お前 本当にトッドなのか？」

「……………皇子……………」

「<ローズ>……………貴様、いつの間に？！

というより 何て、残酷なことを！！」

「あら 皇子様もそうですけど？

トッド様もお似合いだと思いませんか？

セレディー皇子様が、ここの中を何も知らずに目を輝かされている間に 変身していただいたんです。

すつごく 抵抗なさいましたけど 皇子様の為だと説得したところ 納得して頂けました」

「後は、皇子様の準備が整いましたら 挨拶回りに向かいますよ？」

「はあゝ?!」

この格好で 城の中を渡り歩けと？

笑い者にさせたいのか?!」

「勿論……… 皇子様ということは、伏せておきます。

だって 皆さん、とってもピリピリしていらっしゃるんですからね？

ですので トッド様も その事は、承知して頂けますよね？

この国では、あまりそういう事がありませんが 王族の方というのは、外聞を気にするのでしょうか？」

「というより 知られたら、一生の恥だ。

トッドの場合は、剣で自害しかねないぞ？

こいつは、根っからの堅物だからな？」

「でしたら お2人とも バレないように頑張ってください。

王の間には、ちゃんと終わってから向かいますから……………」

「まさかとは、思うが その時は……………」

「さすがに その時は、元の姿ですよ。

それで 滞在中の間 2つの姿を使い分けるんです。

元の姿の間は、いつも通りで結構ですよ？

けれど こちらの姿の時だけは、わたしに従っていただきます。

その代償として 普段では、味わえないようなスリルをプレゼントさせて頂きますから」

「スリル……………とは？」

「あら 目が輝いてきていますね？

けれど それは、経験してみてもからの楽しみです。

だって 行動を起こす前から 種を明かしてしまったら つまらないでしょう？

冒険というのは、何が起るかわからないから 楽しいんです。

皇子様……ですから、ここに滞在している間 楽しみましょう？

嫌々来るという気持ちで吹っ飛ぶような体験をプレゼントさせて下さい」

「今までの世話役と違って 面白いじゃないか。

ナディア姫の場合は、トッドと一緒にいることで 相当楽しませてもらったし」

「やっぱり 以前にナディア様が、投獄された一件 皇子様は、わざとだったんですね？

一歩間違えれば 殿下は、斬られてしまっていたと聞きましたが」

「トッドは、本気じゃなかったさ。

それに この国の王の騎士2人は、優秀だと聞くからな？

ちょっと ヒントを残しておけば 簡単に僕の悪戯によるものだということが、わかっていた。

こいつも それがわかっていて 行動に緊迫感を出させる為に
そのような行動を起こしたただけだ」

「皇子に害する者は、いかなる者でも斬り捨てると剣に誓ったはず
ですが？」

「だが お前には、ナディア姫を斬れないだろう？」

それに 勘違いされてしまっているようだしな？」

「でしたら 今回の滞在で その誤解も解ければよろしいですね
？」

「<ローズ>殿……………それ以前に、招待がバレた場合 国家問題
になる可能性は？」

私はともかく 皇子を辱めたという事で 戦争に発展する場合も
……………」

「それなら 大丈夫ですよ。

いつもの皇子様の悪戯だと言いつつ諷をすれば……………」

「笑顔で とんでもない事を言ってくれるな？」

僕にこんな格好をするという噂が流れてくれたら どうしてくれる？」

「あら ご存知ありません？

宰相閣下のご実家は、成人する年まで 男児は女児として 女児は男児として育てるといふ風習があると聞きます。

子供の頃に そうつた姿をしているからといって 悪い噂が流れるでしょうか？」

「まあ 確かに楽しそうだからな？

お前の企みに協力してやる」

「光栄です。

では、参りましょうか」

訪問3（後書き）

さて 何が起こっているでしょうか？

会話だけですが わかって頂けるでしょうか？

次からは、ちゃんと説明も入れますので………

謁見

「本日は、挨拶が遅れましたこと 申し訳ありませんでした。

世話役の<ローズ>殿と話が弾みまして 時間が過ぎてしまったことを忘れてしまったのです。

どうか 彼女を叱らないで下さい」

皇子セレディーの発言に 一同は、呆氣に取られてしまっていた。

隣に立っている<ローズ>は、皆の視線を浴びて ニツコリ微笑むだけ。

トッドは、一步後ろに控えており 王と王妃や彼等の臣下と目を合わせないようにしているらしい。

「では <ローズ>を気に入ったととってもよろしいのかしら？」

ミリアムは、扇を口元に当てて 発言する。

おそらく その後ろ側では、ワクワクして堪らないのだろう。

「ええ　とてもユニークなお嬢さんだと思います。

いつまで滞在できるかは、定かではありませんが　楽しめるでしょう」

楽しめるという言葉に　宰相を含めた何人かが、笑顔を引き攣らせた。

もしかしたら　とんでもない事になるかもしれない　と、考えているのかも。

「セレディー皇子……君の父君からは、2・3ヶ月ほどゆっくりするようにと先ほど文が届きました。

我々も　それを受け入れようと思う。

この王宮では、しきたりがあるが　貴方は、祖国にいらして思っ
て和んでくれることを願っています」

王ユウリイの言葉に　皇子は、”はい”と、浅く頭を下げる。

「疲れたでしょう……用意しました部屋でお休みなさい。

<ローズ>

お2人の部屋に案内を」

その言葉を受けて 少女は、” 畏まりました” と、丁寧に頭を下げて 後ろへ一歩下がし ” こちらですわ” と、案内していく。

）
）
）
）

「<ローズ>……お前は、まるで物語に出てくる魔法使いだな？」

突然そう言われて　<ローズ>は、手に持っていた箱を取り落としそうになってしまった。

「突然　何をおっしゃるんですか？

わたしは、ただの記憶喪失の女。

皇子様の世話役は、王宮の皆さんの負担を和らげる為ですもの」

「本当に口の減らない奴だ。

どんなに嫌がらせをしても　そんな面と向かって言ってくる奴は、誰もいなかったぞ？」

皇子の拗ねた顔に　　<ローズ>は、思わず苦笑してしまう。

「だから　皆さんの気を引こうと悪戯するのでしょうか？」

けれど　それは、間違ったやり方です。

実際に体験してみて　わたしの考えは、間違っていましたか？」

その質問に　セレディー皇子は、一瞬考えるような素振りをしてから　ニヤリと笑った。

「確かに　楽しい事ばかりだ。

もしも　つまらなかったら　お前を対象にもつと悪戯を爆発させようと検討するところだったが　久しぶりに笑えた。

それに　滅多に見られないトッドの面白い姿も見れたからな？」

皇子の言葉に　控えながら歩いているトッドは、肩を竦める。

「お願いですから　そつちに　目覚めないで下さい、皇子。

とばっちりは、こりこりです」

「ですが トッド様？

とってもお似合いでしたよ？

美しい銀髪は、目立ってしまいますから 黒に染めないといけ
ないのは、残念でしたけれど」

<ローズ>は、ニツコリと微笑んだ。

その発言に 銀髪の騎士は、顔を凍りつかせてしまう。

「もしも 銀髪のままだったら すぐにナディア姫に見つかって
しまっただろうな？

ちゃんと また、<ローズ>に変身させてもらえよ？」

主君の言葉に トッドは、懸命に頭を下げてきた。

本当に 正体を見破られるわけには、いかないらしい。

「はい、お任せ下さいッ！

すれ違う人が、みんな振り返るような美女に大変身しましょうね？

皇子は、可憐な姫様でしょうか…………。

まあ 身分は、知られるわけにいけないので お嬢様ですけど」

<ローズ>は、心から楽しそうに 手にしている化粧道具で 2
人に化粧を施していく。

しばらくして 長身で銀髪の男性は、その場から消え 黒髪の妖
艶なる美女が。

金髪に蒼い目の天使は、フワフワな縦ロールをした本当に可憐なる
美少女に。

謁見（後書き）

誰も気が付かないほどの大変身だと想像してください……………。

秘密1

セレディー皇子が王宮にやってきてから 1週間が過ぎた。

けれど 今のところは、今までのように苦情が殺到することはない。

ただ 皇子は、今までならば見下してきた態度が改められ 逆に賞賛される と城の使用人達の間で噂が飛び交う。

理由は、不明だが それは、<ローズ>が世話役になった事と関係があるはず。

なので この数日間 彼女は、歩き回るたびに その理由を問いただされることが多くなっていた。

おそらく ミリアム様のお部屋に向かえば もっと追及が激しくなるはず。

何たって あそこには、最強な方々が 勢揃いしているのだから。

「一体 どんな魔法を使ったの？」

そう遭うなり首根っこを掴んで言ったのは、一番年が近い侍女仲間のシャルロッテ。

彼女は、黙ってさえいれば　すつごく美人さん。

けれど　実は、田舎貴族の出身で　＜ローズ＞が王宮に召し上げられる前後に奉公する為に入宮してきたらしい。

「あの悪戯皇子が、お茶を運んでいったら　ちゃんとお礼を言ったのよ？！」

もしかして　嵐の前触れなんじゃ……………」

本気で心配しているシャルロッテに　＜ローズ＞は、何て答えたらしいのかわからない様子。

だって　その傍らには、懸命に笑うのを堪えている金髪の姫君とお付で黒髪の美人侍女がいるのだから。

「だけど　今　皇子様のお世話をしなくてもいいの？」

この方々　どこの誰なのかは、知らないけど……………」

「セレディー皇子様の癩癩が激しいので 今の間は、私達が<ローズ>さんと案内して頂いているの。」

私達 皇子と一緒に小間使いで同行したのだけれど……。

あまりに身分が低いから 名乗る事さえも、無作法でしょう?」

皇子様は、この1週間で この遊びを相当楽しんでいると見える。

今では、もうその姿になるのを待ち望んで 役になりきっているのだから。

隣で度肝を抜かされているトッドさんと違って 話しかけられれば 堂々と答えてみせた。

まあ まだ声変わりしていない男の子の特権かもしれないけれど。

シャルロッテは、まだ声変わりのしていない甘ったるい声に メロメロ。

最近気が付いたけれど この王宮にいる人達は、透き通る声に弱い。

「まあ　そうだったの。」

心から同情するわ？

面と向かつては、あの皇子に言いたい事も言えないんですものね？

絶対　祖国の王様と王妃様も、相当気に病んじゃっているんじゃないかな
くて？

実のところ　元・王妃様の嫡子ってこともあつて　扱われている
けどね？

大臣達の提案では、皇子としての身分を剥奪させて　第二皇子の
ガルディー様を皇太子に推そうとする動きがあるそうよ？

今は、王妃様だけれど　側室という立場の時に生まれたでしょう？

でも　あっちの皇子様の方が、とっても性格が宜しいらしいから……
……」

ちよつと、言い過ぎな気がして　止めようとしたら　セレディー
皇子は、ニツコリと笑みを浮かべている。

「本当に　その通りです。」

でも　ですから　この国で羽を伸ばすようにと数度にわたって、
滞在することになったんですよ。

あまり御自分が、王宮にいましたら 話し合いが進まないでしょうからと」

「あら てつきり、王様がユウリイ陛下に泣きついたんだとばかり思っていたわ？」

まさか 皇子自ら 滞在することを望んでいるだなんて。

あんなに色々と悪戯ばかりしているから 早く追い返されたいと思っているとみんなで話してたのに。

もつ……………私、そっちに賭けてたのに」

……………そんな話題で賭け事をしていたのですか……………

<ローズ>は、呆気にとられ 肩を竦めるしかない。

シャルロツテは、そんな同僚の様子に 不思議そうな顔をしていたが 背後から名前を呼ばれたので 駆け出していく。

何でも 仕事の途中だったとか。

盛大み何かが破壊される騒音を轟かせて 破壊魔：シャルロツテは、いざ仕事場へ。

）　　）　　）　　）

「セレミア様（セレディーの偽名）……あまりにも自然すぎて驚きました。」

もしかして 泣いてしまうのではないかと」

<ローズ>は、真剣な表情を浮かべて 息をついた。

その言葉に 姫君は、目をパチクリ。

トッドは、無言でドレスの裾にあるレースを眺めているだけ。

「まさか 何を言われているのかも わかっていなかったわけじゃないませんか？

貴方は、お馬鹿なことをしているかもしれませんが わたしが見た所 それは、逆でしょう？

まさか 天才を通り越して 当たり前のことかわからなくなってしまった……？」

「ああ……さっき侍女が話していたことについてか？

まさに 本当のことだがな？

僕も さつさとそうして欲しいくらいなんだけど」

その発言に <ローズ>は、呆氣に取られてしまう。

「ガルディーは、本当にいい奴だ。

あいつなら いい王様になれると思う。

悪い噂は、全部 僕が引き寄せていれば あいつを悪く罵る連中は、いない。

亡くなったとは、いえ 僕は、王妃の嫡子。

あいつは、今こそみんなに慕われているけど 母上が亡くなる前は、側室の嫡子として 陰湿な嫌がらせを受け続けていたんだ。

これは、定かではないが この国を貶めようとしていた連中の姑息な手段の余波だったらしい。

我が母上もそうだが ガルディーの母もミリアム王妃の友人だったのだから」

<ローズ>は、目を見開いて 息を呑む。

「色々が悪く言う連中は、ガルディーの母が母上を殺したのではないかと言いつ出すものもたくさんいる。

確かに 母上の死には、何かと不審な点があるらしいからな？

だが 王妃は、母上を殺していない。

彼女には、そんな残酷なことが出来ないはずだから。

ガルディーは、彼女にソックリだからな？」

そうキッパリと断言できる姿は、ちょっとカッコイイと思うくローズ>。

秘密2

「侍女達の噂話によりますと　＜ローズ＞は、セレディー皇子やトッド様ではなく　そのお付きのお嬢様方と一緒に行動を共にしているそうです」

シャーリーは、コップに紅茶を飲みながら　報告した。

「あら　＜ローズ＞は、皇子の世話役なのではなかったの？」

キョトンとしたのは、王妃のミリアム。

「ええ　そのはずなんですがね？」

何気なく、＜ローズ＞に聞いてみたんですけど　ただ笑うだけです」

リンは、心配そうに　首を傾げている。

「＜ローズ＞は、仕事熱心な子だから　何か考えがあると思うわ？
それで　皇子の様子は、どうなの？」

被害は、出ていない？」

ミリアムの質問に 侍女達は、一斉に首を振った。

「ありませんわ ミリアム様。

逆に 意外な解答ばかりで……………」

そう言ったのは、シャーリー。

「ですね？」

驚いたことに うちの息子にも 優しいそうです。

この前 ミイナのお見舞いに行ってきましたら 可愛らしいお客
がいらしていたと窺いました。

でも 誰が来たのかは、秘密なのだそうで」

リーンは、不思議そうに呟く。

「なあゝに？」

ミイナは、何かを知っているってことなの？

今度、イリアに聞いてもらいましょうか。

彼の粒良な瞳で見つめられたら　口の堅いミイナも、滑らせるかもしれないもの。

普段は、口下手で話さない子なのに　イリアの事になると本当に色々と教えてくれるから。

この前の盗賊の一件も　ミイナの式神で発覚したことだものね？」

王妃の暴走的な発言に　誰も止められる人物は、この場にいない。

ユウリイ王と騎士2人と宰相や侍女頭は、他の仕事がある為　今日のお茶会には、参加していないのだから。

陛下方は、何でも新たに不穏な動きを察知したらしく　その話し合い。

ルチアは、新しく入ってきた侍女の教育中らしい。

そして今日のお茶会のホステス役は、恐れ多くも　ミリアム王妃だった。

一国の君主の奥方に　このような仕事をさせるといふ事は、無礼極まりないはず。

けれど　当の本人が、やると決めてしまったことなので　止める事の出来ない。

その上　彼女の入れる紅茶は、とても美味。

さすがのルチアも　これには、舌を巻いて　賞賛してくれるばかりなのだから。

何でも　王宮をコッソリ抜け出した時に　財布を落としてしまい　そのまま下町の喫茶店で住み込みで数日働いたらしい。

その時の経験のお陰で　それまでは、匂いを嗅ぐだけでもとんでもない事になっていたミリアムの入れた紅茶は、素晴らしい出来になったとか。

勿論　コッソリ王宮を護衛もなしで1人で抜け出した咎で　ルチアには、数時間の説教を受け　王命で侍女に扮した武術に長けた女性を紛れ込ませる事を約束させられてしまったそうだ。

そして その武術に長けた侍女というのが、今もこのお茶会に参加している シャーリーとリーンに出産を控えたミイナだったりする。

彼女達が、そういった経緯で侍女になったという事実を知るのは、それを命じた王と直属の臣下。

そして 偶然知ったとはいえ 守られる側の王妃のみ。

実は、ある事情から ユウリイ王よりも 王妃ミリアムの命が狙われることが、ごく当たり前となっていた。

侍女頭であるルチアには、武術に長けている下級貴族の娘 と説明してあるが 事実、伏せられている。

信用していないというわけではなく 真実を知り 困惑を防ぐ為。

万が一の場合 彼女達は、他の侍女の命よりも 王妃だけの盾になる覚悟が必要不可欠なのだから。

普段は、侍女頭の命に従っているものの 彼女の犠牲にしなければならぬ可能性が高い。

普段は、オットリしており 虫も殺さぬような性格だが 彼女達が、侍女として上がってから 不審な死を遂げた下働きの者も年々増えていた。

その中には、年端もいかないうちにも子供もあり 外見に似合わず 残酷な面も併せ持つ。

毒を仕込まれる事は、日常茶飯事となっており 毒を察知しやすい能力を持つミイナが、これまで 毒見する事となっていた。

けれど 現在は、妊娠休暇中の為 危険度が増すが リーンとシヤーリーが、交代で事前に毒見を行っている。

そして 王妃が、自分を守ってくれる人物が誰なのか知った事件によって 彼女に取り巻く侍女は、一気に減ってしまう。

驚いたことに ほとんど全員が、刺客だということが判明したのだから。

この時ばかりは、あのルチアも驚きを隠せず 高熱で寝込んでしまった。

自分が、懸命に教育した侍女の中に 敵の送り込んできた暗殺者が

いたという真実に耐えがたかったのだろう。

「けれど つまらないわ？」

今日は、陛下達も 宰相達もこないんですもの。

しかも <ローズ>は、セレディー皇子と一緒に……。

ハプニングが、起これば 楽しいのに「

さすがの爆弾発言に 侍女2人の声が、その場一体に響き渡った。

秘密3

王の間では、国王を含めた臣下達が険しい顔になっていた。

「困った事になったな？」

今回の皇子の滞在に　こんな理由があつただなんて……………」

宰相は、頭を抱えるかのように　溜息をつく。

「この事……………セレディー皇子は、存じておられるのか？」

コーネリアは、兄と同じ顔をして　唇を噛む。

「知っているのかも。」

ミイナの話じゃ　この前、＜ローズ＞に連れられて家に遊びに来たらしいんだけどさ？

ちょっと　そっち系の話には、触れないように注意している感じだったらしいから。

＜ローズ＞の方は、自覚無しにそれに合わせていたらしいし」

イリアは、首を傾げて 言う。

「だったら トッドも知っているって事か。

まあ 話してくれるはずもないだろうけど」

ユウリイは、珍しく真剣な顔になっていた。

「けれど 下手すれば こちらにも余波が来るのでは？」

あちらの王は、平和主義ですが 周りの大臣の中には、乗っ取りを企む者もいるとの話です。

先の一件でのミリアム様に送られてきた刺客も そちらの一派の手の者ということは、確実ですし」

宰相の言葉に 国王は、遠くを見つめる。

「やはり…… 王妃に俺の真名を預けていることが、刺客を何度も送られてくる原因になっているんだろうな？」

俺を殺すには、真名を知らなければ 致命傷を与えることが出来ないのだから」

その発言に 臣下達は、顔を見合わせた。

「まさか 王妃の命の危機を回避する為に 真名を撤回させるおつもりじゃありませんよね？」

そんな事をすれば ミリアム様は、確実にキレますよ？

最初に 儀式を中止すると言い出した時よりも………確実に。

それに 王妃は、古来より 伴侶となる王の命綱である真奈を授かり 身を持って守る事が、最も重要な任務となっています。

以前に ミリアム様とその話題になりましたけれど あの方は、真名を守っている事を誇りとしているようでしたからね？」

コーネリアは、呆れたように 断言する。

「ああ あの時、本当に厄介だった。

1人で王宮を飛び出して 前・国王付きの騎士のウィリアム侯が、影で護衛に付いて下さり 使役でその場を知らせて下さらなければ
どうなっていたか」

宰相は、思い出したように 遠くを見つめた。

「そういえば そんな事ありましたっけ？」

ルチアさんの旦那さんは、今でも 万が一の事を考えて ミリアム様が足を運びそうな場所に影を忍ばせてくれているそうですよ？

まあ……………それも <ローズ>が来てからは、あの脱走癖も消えているみたいですけどね？」

イリアは、そう呟いて ニヤリと笑う。

「笑い事じゃない。

数日も戻られなかったと思ったら 下町の喫茶店で下働きになっておられた事もあったじゃないの。

すぐに駆けつけたから良かったものの 後少しでも遅れていたら 刺客に襲われていたところだった。

王妃本人は、おいしい紅茶を入れる技術を身に付けたと嬉しがっているが……………」

第一騎士の言葉に 王も、言葉が見つからない。

「だが その一件があつたからこそ 侍女の中に忍び込ませることを承諾させたんだぞ？」

それまでは、嫌の一点張りだったからな？

自分の身は、自分で守るから……と。

最初は、それが誰なのか明かしていなかったが もう周知になっているがな？」

「ああ あの一件は、懐かしいですね？」

俺……自分よりも武器の扱い方に長けている女性、初めて出逢いましたから。

あの時から 俺の心は、ミイナに奪われたんです」

「そこ……惚気るなッ！

仕事に支障が出るようなら お前を他の場所の騎士に下げなければならんだからな？

ミイナには、子供が生まれたら またミリアム様付きの侍女兼護衛に戻ってもらうのは、確実なのだから」

宰相の冷たい一言に イリアは、”肝に命じます！”と、敬礼。

秘密 4

「ところで セレディー皇子は、なぜ 自分の父王の真名を持っている？」

普通ならば 現・王妃のソフィリアが、守るべきだ」

ユウリイの質問に 宰相も、首を捻った。

「あまり例が無いのですが もしかしたら 皇子をお産みになられた時に 真名も一緒に皇子に授けられた可能性があるそうです」

「例が無いのに なぜ、そうだと断言できる？」

兄の発言に コーネリアは、美しい顔を歪める。

「前・王妃が亡くなられて間もない頃 他国からの攻撃を受け王が瀕死の重傷を負った話は、お前も知っているだろう？」

もしも 真名を授かっていた人物が、死亡した場合 通常ならば 真名は、王の元に戻ってくるものだ。

だが 王は、奇跡的に回復を果たした。

つまり 何者かが、王の真名を守っていたということになる。

今の王妃は、その頃 まだ側室の位のままだったし その戦争も、前・王妃の死を待っていたかのような襲撃だった為 真名を誰が守っているのかを確認する暇も無かったと聞く」

宰相は、そう言って 溜息をついた。

「つまり 一番可能性が高いのが、真名を所持していた母の胎内から生れ落ちた息子に 受け継がれたってことだな？」

真名の形は、人それぞれだけど 体の一部として当たり前の見た目ならば 乳母でも気が付かなかっただろう。

でなければ こんな面倒な事になっているはずがない。

おそらく 前・王妃の死は、真名を巡る争いに巻き込まれたと結論付いて間違いないはずだ」

ユウリイの説明に 臣下達は、息を呑む。

「もしも その事が公になれば 皇子の周り、相当騒がしくなるのでは？」

当の本人は、自覚を持っているのでしょうか？」

コーネリアは、真剣な顔になって言う。

「どうだろうな？」

もしも わかっているんなら あの皇子は、王妃と正反対の部類になるぞ？

まあ……… 根本的には、似ているかもしれないけど」

イリアは、どこか呆れたように 腕を組んだ。

「じゃあ 何か？」

あの皇子の問題行動は、自分の近くにいれば 死が待っているってことを気付かせようと？

確かに 前・王妃が亡くなる前後して 皇子の暗殺も未遂で何度も起こっていたと聞いたが」

宰相は、どこで仕入れてきたのか 様々な情報を提示する。

そこには、皇子の唯一の騎士となっているトッドが忠誠を誓うそれ

までに遭遇したという 殺人未遂の事細かな内容が収められていた。

中には、一緒に育ったはずの乳母兄弟までもが セレディー皇子の命を狙う刺客となっていたという事実まであったのだから 気分が悪い。

「この乳母兄弟ですが 皇子より5つほど年上でしてね？」

母親……つまりセレディー皇子の乳母は、彼を庇って 刺客に殺害されています」

宰相の補足に 皆は、溜息をつく。

「母親を殺された恨みを、守るべき相手に向けるだなんて……ッ！

私達も、そのような事考えたこと無いというのに。

母が死んだ事は、確かに哀しかったけれど 大切な方をお守りして殉死したのは、誇りに思うのって 私達だけなの？」

コーネリアは、唇を噛み締めながら 呟く。

その声は、微かに震えている。

妹の気丈な様子に 宰相は、ゆっくり近寄って 肩を優しく叩いた。

そんな兄妹の様子を見守って ユウリイは、申し訳なさそうな顔をしている。

「ああ そういえば？」

宰相閣下とリアの母君は、陛下の乳母だったんでしたっけ？」

イリアは、ソツと王座に近寄って 小声で言った。

「ああ その縁があつて 2人とは、幼い頃からの幼馴染なんだ。父親は、父の第一騎士で 母親は、平民だったが 何世代か前に没落した貴族令嬢だったらしい。

礼儀作法も、申し分なかったから 俺の乳母に抜擢された。

ルチアとは、同じ頃に王宮に上がってきた仲で 親友だったと聞く。

だが 俺を狙つて、王宮に忍び込んできた刺客と相打ちになつて

3日ほど意識を何度か取り戻したんだが そのまま亡くなった。

相手の刺客は、即死だったらしいんだが 毒使いだったらしくて

……な？

2人の母のサーシャは、ミイナ達の先代の護衛だった」

ユウリイは、低い声で 幼馴染の2人を見つめる。

）　　）　　）　　）

「けど 何だか納得いかないんですよね？

何で 真名を王妃に預けることが、しきたりになっているんです？

普通の一般家庭じゃ 滅多なことが無い限り、そんな厄介な儀式
しませんよ？」

イリアは、不思議そうな表情を浮かべて 首を捻った。

「あまり 口に出すことじゃない。

真名を王妃に預けるといふのは、古き時代の王族の聖なる儀式の1
つだ。

戦争が起これば 女子供は、王宮の祈りの間に 預かった真名に
自らの祈りの力を注ぎ 勝利することを願いつける。

遙か昔 この国を建国した騎士を想い ずっと願いつけていた皇

女の願いが、神々に届けられ　勝利を得たように…………。

俺も　最初は、そんなのただの迷信だと思っていたが　あいつの起こした奇跡は、イリア…………お前も自分の目で見たはずだ」

「確かに　そうでしたね？

あんまり平和が続くもんですから　忘れてましたよ。

けど　また　戦いが起こりそうですけどね？」

秘密5

「<ローズ>…………お前、どうして 決まった時間にナディア姫の検診を受けなければならない？」

どこか 病気なのか？」

セレディー皇子は、心配そうに 尋ねてきた。

今の装いは、いつも出歩いている姫君ではなく いつもの皇子の姿だ。

先ほどまで 王の間で形式な挨拶をしたところ。

その質問に <ローズ>は、”問題ありませんよ”と、微笑む。

「わたしは、以前に申し上げた通り 全ての記憶を失っておりません。

それに お恥ずかしながらお見せ出来ませんが この辺りに薔薇の形の痣があるのです。

原因は、わかりかねますが 痣が濃くなっているので 毎日ナディア様に経過を見て頂くよう 陛下やミリアム様からのお達しなの

ですよ。

別に どこかどう悪いというわけでは、ありません。

まあ ナディア様は、違う方面のことを心配なさっているようなんですけどね?」

その言葉に 皇子の表情は、どこか暗い。

どうしたのかと口を開く前に <ローズ>は、後ろから誰かに腕を掴まれた。

そして そのまま 部屋の外へと引き摺られてしまう。

一体 何事か と顔を上げてみると 外に出ると、すぐに ト
ツドが物凄い勢いで頭を下げた。

「ご無礼を承知で申し訳ない」

おそらく 咄嗟のことだったのだろう。

見ているこっちが、気の毒になってくる。

「お顔を上げてください。」

詳しい事情は、存じ上げませんが 先ほどの皇子の様子からして話を続けさせるのは、酷だったのでしょうか？」

<ローズ>は、先ほどのセレディーの顔を思い出して 呟いた。

「はい 申し訳ない。」

皇子は、時より 貴女とご自分の母君を重ねられているようでしたから」

「母君と？」

詳しくは、お聞きしておりませんが 皇子が幼い頃に亡くなられたとか」

<ローズ>は、目を伏せているトッドに向き直る。

「セレディー皇子の生母であられる前・王妃のセラミア様は、とても美しく慈悲深い方でした。」

ある事情から 行き場を失った私を、受け入れるよう王に掛け合ってくださいましたのです。

そして 跡継ぎであられるセレディー皇子が、お誕生になられてとても喜んでおられました。

けれど セレミア様には、それ以前から 刺客が送られてくることが多かったのです。

そして とうとう 亡くなられてしまった」

「では やはり、何者かに暗殺されたと？」

<ローズ>は、険しい顔になった。

「詳しいことは、わかりかねます。

ですが 間違いなく 王の命を狙った事による暗殺は、間違いな
いと考えております」

断言する騎士に 少女は、驚きを隠せない。

「<ローズ>殿……貴女は、真名をご存知ですか？

ユウリイ陛下の真名は、現在 ミリアム王妃が守っておりますが」

その質問に　＜ローズ＞は、以前にルチアから聞いたことを思い出
す。

「はい……確か　王妃様が、いつも大事に守っておられる陛下の
瞳の色と同じ色の指輪のことですよね？」

陛下の場合は、指輪に収められている宝石ですが　真名は、人ぞ
れぞれ　形が変わっているとお聞きしました」

「はい　この世界では、古来より　王と王妃の間で　真名を守る
という古きしきたりがあります。

それは、王に即位したと同時に行われる聖なる儀式とも呼ばれてお
ります。

戦いに身を投じる者を想い　その命の糧となる真名を祈りと共に
守る。

それが、女性だけの戦いとも比喻されているのです」

「もしかして　前・王妃様が命を度々狙われていたのは、王を狙っ
てのことという事ですか？」

その結果　セレディー皇子の母君は、殺害されてしまった………」

＜ローズ＞は、目を大きく見開いて　息を呑む。

「お察しの通りです。

勿論 皇子自身も 命を狙われたことがあります。

そして その罪を、何度も現・王妃様とその御子息に向けられるよう 複雑な人間関係もあるのです」

「でも 皇子様は、断言なさっておられました。

ガルディー皇子もソフィリア王妃も そのような事をなさらないと。

まさか それは、違うと………?!」

混乱してきた<ローズ>に 銀髪の男は、苦笑する。

「ええ 勿論 お2人は、犯人ではありません。

セレミア様を殺害する理由は、どこにもなかったのですから。

先ほどのユウリイ陛下の真名をミリアム王妃が、守ったおられたように セレミア様も、王の真名を守っていた。

同じ男性を愛したとしても その命の危険にしてまで 恋敵を暗殺する理由が、どこにあるでしょう?」

「それに 皇子を狙う理由もありませんね？」

<ローズ>は、真剣な顔になった。

「だって 王の真名は、セレディー皇子が所持しているから……………」

その発言に さすがにトッドも 目をパチクリさせてしまう。

「どうして……………いつ、お気づきに？」

「今の話を聞いていて ちょっと、気になることが出てきたんです。」

皇子の変身を手伝っていた時 後ろの首辺りに 蝶の紋章の様なモノが、ありました。

まるで エメラルドのように輝いていたのが、印象に残っています。

皇子の瞳の色は、母君譲りと覗きましたが お父上は、エメラルド色なのでは？」

「まさか それだけの要素で結論なさるなんて 少し驚きました。」

ええ その通りです。

紋章が露になったのは、ごく最近のことですが その事が発覚してから、頻繁に皇子のお命が狙われるようになりました。

間違いなく 何者かが、間者となっていると王もお考えになっておられます」

「では それを一掃している間 皇子は、こちらに訪問しておられるという事ですね？」

切り返しに もうトッドは、驚かない。

「皇子には、内密にしておりますが もしかしたら お気付きになられているかもしれません。」

悪戯行動が悪化したのも 皇子が最も信頼していた乳母兄弟が、皇子暗殺に関わっていたと発覚してからですので。

彼らは、皇子殺害未遂で 処刑されましたが……………」

それを聞いて <ローズ>は、唇を噛む。

「2人の母親は、皇子の乳母で 皇子を守って亡くなったのです。」

その頃は、まだセレミア様もご健在で　母を亡くした2人に他の大臣達の反対を押し切って　様々な待遇を与えになりました。

ですが　あの兄弟は、その恩を仇で返したのです。

なので　そんな風に<ローズ>殿が悲しむことはない」

「けれど　セレディー皇子にとっては、とても大切な方々だったのでしょう？」

いくら　自分の命を狙っていたとしても　その心は、偽れないはずです」

そう呟く<ローズ>の目からは、大粒の涙が落ちている。

トッドは、そんな少女の様子に　何とも言い難い様子で見守っているだけ。

そこへ　誰かが、走って来る音が響く。

「トッドッ！」

貴方、何をしているのです！！

<ローズ>を泣かせるだなんて　最低だわ?!」

金きり声は、ナディア王妹殿下のものだった。

秘密6

ナディア王妹殿下の出現に トッドは、明らかに動揺している様子が見て取れた。

殿下自身も どこか感情的になっている。

「<ローズ>を泣かせるだなんて 相変わらず 最低な男ッ！

セレミア様とソフィリア様のお話から 少しは、マシになったと思っていたのに！！」

<ローズ>は、突然の事に涙が吹っ飛んで 急いで、今にも飛び掛らんとしているナディアの腕を全力を掛けて止めに入った。

「ナディア様……………誤解ですッ！

別に トッド様に泣かされていたわけじゃありませんって！！

以前も 迷っていた時に 宰相閣下に案内されて 怖い話をされて驚いていたところに 苛められている ってシャーリーさんに誤解されてしまった事もあるんですから……………」

「宰相の場合は、誰が相手でも 苛めているようにしか見えません

ッ！

けれど この男……トッドの場合は、用がない場合しか 他人と会話する事もない。

なのに さつき私が見た状況では、貴女がトッドに迫られて 泣いているようにしか見えなかったわ？」

その指摘に <ローズ>は、困ってしまう。

確かに 腕を掴まれていた状態が続いていたのだから。

トッドの方に視線を向けてみるが 不自然に目を逸らされてしまった。

「本当に 何もされていない？！

いつも検診時間ピッタリに来るのに……<ローズ>ってば、いくら待っても来なかったでしょう？

だから セレディー皇子に厄介ごとを頼まれているんじゃないかと迎えに来たのよ」

ナディア殿下は、そう言って 厳しい視線を銀髪の騎士に向ける。

視線を感じているようだが トッドは、絶対に振り返ろうとしない。

そして、そっぽ向いたまま ”殿下の元に戻ります”と、短く言う　　部屋の中に入っていつてしまう。

男がいなくなったのを確認して ナディアは、再び<ローズ>の顔を覗き込んできた。

「<ローズ>……………さっきは、脅されていただけなのでしょう？」

当の本人は、消えたわ？

さあ……………何があったのか 話して？」

あまりに緊迫している様子なので <ローズ>は、固まってしま
う。

その反応をどう取ったのか 殿下は、さらに険しい表情に。

観念して <ローズ>は、口を開いた。

「セレディー皇子が、お父上の命綱を守ったおられる為　お命を狙う輩がいると。」

その中には、皇子が最も慕っていた乳母兄弟もいらっしゃったと伺いました。

実の兄のように慕っていたそうなのに　処刑されてしまったと。

トッド様は、同情する予知はないとおっしゃられたのですが　わたしは、悲しくて……………。

そうしている時に　ナディア様が、いらっしゃったのです」

「ああ　そういえば　前は、一緒に来ていた兄弟が　一緒に来なくなったわね？」

そう……………処刑されたの。

母が、皇子を守って死んだからといって　逆恨みするなんて……………馬鹿ね？」

どこか　感情のない発言に　＜ローズ＞は、息を呑んだ。

その反応に気が付いたのか　ナディアは、哀しそうに笑った。

「これは、王族に生まれた宿命よ。」

誰かが犠牲になって 生き残る。

私と兄上も そうやって 今まで生き残ったわ？

今の私は、王位継承権を返上したから 名前だけ殿下だけど……
それまでは、色々な刺客を送り込まれたし。

信じていた人が 実は、刺客だったこともあったし 大切な人が、
犠牲になったこともあった」

遠くを見つめて呟く様子に <ローズ>は、不思議そうに 首を傾
げる。

「宰相とコーネリアの母も 私と兄上の乳母だったの。

けれど 私達を狙った刺客と相打ちになって 亡くなられたわ？

後で聞いた話 元は、母の護衛を務めていた侍女だったらしいんだ
けどね？

2人は、私達を恨むことなく 今じゃ 国の為に忠誠を誓ってく
れている。

私怨で 守るべき主を、害しようとするなんて 以ての外なのよ」

そう語るナディアは、ちゃんと王族としての覚悟を決めているよう

に
思
え
た。
。

突然

<ローズ>は、その日　ごく当たり前に　皇子と騎士を中庭へと案内していた。

とても晴れやかで　空気も澄んでいる。

庭を飛び交っている風が、心地よい。

「何度も訪問していたが　こんなにも美しい場所があったなんて知らなかった」

セレディー皇子は、嬉しそうに　目を輝かせていた。

子供らしい評を浮かべている様子に　<ローズ>は、嬉しそうに微笑む。

「光栄です。

ここは、わたしが初めてミリアム様の侍女に上がらせていただいた時に　案内された思い出の場所なのです。

色々な花があって　目の保養にもなるのですよ?」

その言葉に セレディーも、つられたように笑う。

「亡くなられた母上に伺った事がある場所に似ているな？

それに トッドの話にも出てきた」

視線を受けて 後ろに控えていた銀髪の騎士が、ゆつくりと歩み寄ってくる。

「ここは、先代王妃様が自らお育てになられたと聞いております」

トッドの言葉に <ローズ>も、ある事を思い出した。

「ミリアム様のお話ですと ここは、幼い頃からの隠れ家だったそうです。

宰相閣下やコーネリア様方と一緒に 遊び回っていたと。

ここは、教育係の方々を巻くのに便利な場所だったそうなのです」

「あのユウリィ王にも そのような頃があられたかッ！

しかも 堅物な宰相までもが、そのような行動をしていたなど……
…意外だな？」

皇子は、楽しそうに笑っている。

「誰でも 子供の頃というのは、純真なですよ。

セレディー皇子も、後何年かすれば 立派な殿方になられると思います」

正直な感想を話すと 目の前に立っているセレディーが、真剣な顔になっていることに気が付いた。

何だか その視線は、こそばゆい。

「前にも話したが 僕は、王位継承に興味ない。

ガルディーが、王になればいいと思っているのだから。

だが 僕の存在は、色々な火種になるということも知っている。

今は、時ではないが それが片付けば 母の実家の養子に入ろう
と考えているんだ」

その話を聞きながら　＜ローズ＞は、目をパチクリさせてしまう。

なぜ　そんな大事な話を、自分にするのだろうか？

「そうならば　俺は、ただの下級貴族でしかなくなる。

今までは、王族の第一皇子であるセレディーに付きまっていた連中も　手の平を返すだろう。

金魚の糞達も　僕を蔑む側に回る。

それまでは、王族である事で守られていても　位が下がれば　簡単に蹴落とされる事もありえることだ。

だが　僕には、どうしてもやりたい事がある」

セレディーの言葉には、どこか熱が籠っているようだ。

「僕は、ガルディーが　父上のような賢王になれるよう　一から基盤を作っていきたいんだ。

その為には、色々と問題も出てくる。

だが　僕は、＜ローズ＞がいてくれたら……どんな事でも乗り越えられると思うんだ」

皇子は、そう言つと　　<ローズ>の手を手にとって　甲に口付けを落とした。

キョトンとしていると　耳まで真っ赤になつて　セレディー皇子は、”返事は、いつでも”と、言い残して　その場から立ち去っていく。

トッドは、皇子の後を追つていったようだが　苦笑気味。

<ローズ>は、意味がわからず　立ち尽くしていた。

「一体……………何が起つたの？」

目をパチクリさせ　　<ローズ>は、手の甲に視線を向ける。

「え……………これって？」

セレディーが口付けた手の甲には、薔薇の紋章が浮かび上がっていた。

「どういう事なのかしら……………なぜ？」

それに 胸に浮かび上がっている痣にも、似ているような気が……」

…ガサ……ガササ…

背後から 足音が聞こえたので 振り返る。

すると 目の前には、太陽の光の逆行で見えないが 何者かが、何かを振り上げているらしい。

避けようとするも 足が竦んでしまい その場に座り込んでしま
う。

そして 空気を切るような音が、耳に届く。

何か、暖かい液体が体を伝っていった。

何が起こったのか、理解できないでいると いくつかの足音が、
微かに聞こえてくる。

それが、誰なのかを確認して <ローズ>は、その場に崩れ落ち

た。

闇の中に入り込んだ時に 入ってきたのは、甲高い悲鳴……………。

「いやあ

ッ！

<ローズ>!!」

〽
〽
〽
〽

「ミリアム様……足元にお気をつけ下さいね？」

リンは、真剣な表情を浮かべて 言った。

「ちょっと リーン？」

過保護すぎやしないかしら？

わたくし そんな風に手を引かれるの 恥ずかしいのだけど？」

ミリアムは、少し顔を赤らめてしまっている。

「あらあら……そんな事をおっしゃらないで下さい。

我々は、心からお喜びを申し上げているのですよ?。」

シャーリーは、弾むような口調で 微笑む。

「ちちうえが、もうしあげておりましたが おうひさまは、オメ
デタイだそうですね?

ボクからも おんれいもうしあげまする」

リンのスカートにくっついていてる幼いプラチナブロンドの幼い男
の子は、キリリとした眼差しで 軽く会釈した。

「さすがは、宰相の息子……………顔立ちも似ている分 ミニチ
ユアね?

将来 あんな風に仏頂面になって欲しくないわ?。」

王妃は、メロメロになりながら 幼子に抱きつく。

「残念ながら ネオは、おそらく父親似です。

家にいると いつも真似ばかりしているんですから。

最近じゃ 口調ですね?。」

リーンは、苦笑しながら 息をついた。

「そういえば ネオ？」

あなた……最近、金髪を巻き毛にした女の子と一緒に遊ぶ事が多
くなったそうだけど？

一体 どこで知り合ったのかしら？」

シャーリーは、思い出したように 甥っ子の顔を覗き込む。

「金髪の……？」

ああ ロッテが、会ったと話していたわ？

皇子付きの使いだと話して……名前は、確か セレミアだ
ったかしら。

ネオ……その方と一緒にいたのね？」

リーンの言葉に ミリアムは、足を止めた。

突然歩みが止まってしまったので 一行は、少し転びかけてしまう。

「どうしたんですか……………急にッ！」

先ほども申し上げたように 転ぶのは……………ミリアム様？」

シャーリーは、目を大きく見開いている主の様子に ” どうなさったのですか？” と、困惑する。

「セレミアという名前は、セレディー皇子の母君の名前よ？」

それに 皇子も お美しい金髪よね？

<ローズ>がいつも王宮の中で連れ歩いているのは、その少女だと聞いたけれど……………」

シャーリーとリーンも、その事に気が付いたらしく 顔を見合わせた。

「セレディーおうじは、ないしょだとおっしゃっていました。

ミイナもしていますよ？

だけど <ローズ>が、ひみつのあそびだから……………って。

でも ボクは、セレミアのすがたのときのおうじ だいすきです。

だって やさしいから」

ネオは、ニコニコしながら 言う。

「言っても良かったのかしら？」

ミリアムは、心配そうに 首を傾げる。

「<ローズ>は、ときがくれば みんなにはなすつもりだといっていました。」

おうじも とつてもたのしんでいて……。

さいしよは、すつごくはすかしかったけど いまは、いままでし
らなかった このくにのすばらしいことをすることができたとおっ
しゃられていました」

「<ローズ>らしい考えですね？」

確かに 皇子は、その遊びのお陰で 皇子として接する以外の皆
の姿勢を知る事が出来たのかもしれない」

リーンは、我が子の髪の毛を撫でながら 微笑む。

だが ネオの体が、突然 強張った事に気が付いて ” どうしたの？” と、顔を覗き込んだ。

そして 息子の顔色は、真っ青になっており ミリアムとシャーリーも、心配そうな顔になった。

「あつちから ちのにおい……………」。

なにかが、きれるおと……………きこえた……………」

血の気が失せている幼い男の子の発言に 女3人は、顔を見合わせ てしまう。

シャーリーとリーンは、ガーターの下に隠されているそれぞれの武器を取り出し 王妃と幼子を背後に回し、ゆっくりと歩み寄って いく。

すぐ先の茂みでは、近づくに連れて 確かに鉄の臭いが……………。

息を潜ませながら 一同は、進む。

そして 視線の先に広がったもの……………。

自分達の姿を確認して 崩れる背中から斬り付けられていたくろ
ーズ>。

「いやあ ツ！ <ローズ>！！」

ミリアムは、我を忘れて 甲高い悲鳴を上げた。

戸惑い1

王の間には、王と王妹殿下のみが その場にいた。

他の臣下達には、違う調査に専念してもらっている。

「ナディアア……………<ローズ>は、まだ意識が戻らないのか？」

ユウリイ王は、悲しげな表情で 妹に問い掛けた。

「傷は、出血の割に 深くなかった。

傷痕も 残らずに復元したのだけれど 意識の糸だけが、どこか
遠く過ぎるみたいで 見つけられないのよ。

もしかしたら 襲い掛かったのと同時に 意識を封じ込める呪い
を施したのかもしれない」

その言葉に 王座に座る王の顔が、険しくなる。

「<ローズ>を襲った刺客は、一体何者なのか……………？」

王宮内には、俺と宰相が 定期的に結界を張り直しているはずだ。

なのに そんな中に 刺客が往来するなど……………」

「<ローズ>が襲われた場所は、中庭の温室。

あそこは、子供の頃から 私達の隠れ家だった事を覚えているでしょう？

つまり 刺客自身も あの場合に見を潜んでいたという事になるの。

ネオが、血の臭いがすると駆けつけたところ 刺客と鉢合わせたそうよ。

シャーリーとリーンの話だと 途中まで追ったそうなのだけど 深入りは、危険だと判断したらいいわ？」

「成る程……………その刺客は、この王宮の造りに詳しいという事が。

今も王宮内に <ローズ>を襲った刺客が居着いている可能性もあるな？

早急に 身辺の洗い直しをさせよう」

「その意見には、私も賛成だわ？

今回の事だけでなく セレディー皇子の滞在で 何かと人員を割いている。

<ローズ>が襲われた原因は、王妃のお気に入りの侍女である事と皇子の世話役という動機を踏まえるべきだと思う。

あの時刻は、ちょうど 王妃が通例散歩をしている頃だった。

そして その直前まで セレディー皇子が、一緒にいたそうなんだから。

シャーリー達には、護衛の強化を申し入れたし…… トッドにも、無用心に城の中を歩き回らないように言っておいたのよ」

「珍しいな？

てつきり…… トッドも容疑者の中に入っていると思っていたんだが」

ユウリイの発言に ナディアは、嫌そうな顔になった。

「実は、私…… <ローズ>が襲われていたという時刻 セレディー皇子とお供のトッドと出くわしていたのよ。

皇子ってば すっごく顔を真っ赤にさせていて…… 頭を抱えていたの。

トッドは、それを宥めていたみたいだね？

なぜか 私まで一緒に慰める羽目になったのよ。

だけど すぐに……王妃の悲鳴が、王宮中に響き渡ったから
詳しい事は、聞けなかったんだけどね？」

「ミリアムは、血塗れになって倒れていたくローズ>の目の当たり
にして……相当ショックを受けている。

今朝も 体の不調を訴えていたらしいが………」

「そうね、時期が悪いわ？」

後……真名の所持について 話し合わなければならぬと思うの
だけど？」

含み笑いをして立ち去っていく妹に ユウリイは、意味がわからな
かった。

＼
＼
＼
＼

「ミリアム様……そろそろ、お部屋に戻りましょう？」
「このままでは、お体が休まりません」

リーンは、心配そうに 声を掛けた。

侍女の言葉に 王妃は、悲しげな表情を浮かべている。

その視線の先には、ベットのの上に横たわっている<ローズ>が……。

「ミリアム様………<ローズ>は、大丈夫ですわ？」

ナディア殿下も、おっしゃられていたではありませんか」

シャーリーは、ニツコリと微笑んで ミリアムの手を自分の手で覆った。

「けれど <ローズ>は、目を覚ましてくれないわ？」

わたくし………怖いよッ！

お母様も、眠ったまま 亡くなられてしまったから………。

もしも <ローズ>まで………とを考えてしまったら「

王妃の顔は、涙でグチャグチャになってしまっている。

そんなミリアム妃の様子に　侍女2人は、戸惑いを隠せない。

「ミリアム様？」

<ローズ>の事が心配なのは、十分承知しております。

ですが、ご自分の御身にも気遣って頂かなければなりません」

その言葉に振り返ってみると　ルチアが、仁王立ちになっていた。

「お母君が、生きておられれば　同じ事を申されるはずですよッ！」

あまりに激しい剣幕だったので　ミリアムは、侍女2人に手を引かれ　そのまま部屋を後にする。

戸惑い2

王宮内は、今までにないくらいに警備が強化されていた。

1人で敷地を歩く事は、固く禁じられ 特に王妃付きの侍女とセレディー皇子を含めたお供も 護衛がつけられているのだから。

それは、調査を続けているにも関わらず <ローズ>が襲われた動機が、わかっていない為。

襲撃が発覚してから 1週間が経とうとしている。

けれど 犯人は、未だに捕まっていない。

襲った人物を見た可能性のある<ローズ>は、意識が戻ることなく その警備も厳重にされていた。

見舞い客は、部屋に入る前にどの身分であろうが 持ち物検査を受ける事が義務付けられている。

それを行うのは、恐れ多くも 宰相閣下。

彼には、隠された物を見抜く能力があるので　その任務を行う事に。

その為　本来の宰相の仕事は、代理として　妹のコーネリアが請け負っているらしい。

「宰相………<ローズ>の見舞いに参ったのだが」

どこか細い声に　宰相は、無言で向き直った。

視線の下には、黒に金を縁取ったマントを纏っているセレディー皇子が　トッドと護衛を引き連れて立っている。

その姿を確認して　宰相は、少しだけ目を細める。

皇子が見舞いに訪れたのは、最初に運び込まれた時に駆け込んできただけだったのだから。

<ローズ>が襲われる直前まで　セレディーとトッドがいた事は、報告を受けていた。

中には、彼女の事を可愛がっていた者達が　皇子とこの騎士に対する不満が募っているらしい。

宰相自身　王妃が、倒れているくローズ>を発見した時　妻と息子も居合わせたという話を聞いているので　心が穏やかではないのだから。

「そうですか……ぶしつけですが　持ち物をご確認させて頂きます」

宰相は、そう言って頭を軽く下げると　眼鏡を取る。

すると　瞳の色が、虹色に変わり　すぐに眼鏡を掛け直す。

「結構です、お入りになって下さい」

その言葉を受けて　セレディーは、ゆっくりと中に入っていく。

「トッド……貴様は、入らないのか？」

宰相の言葉を受けて　銀髪の男は、肩を竦めた。

「野暮な事は、したくないんだ。

それに <ローズ>殿が襲われたと聞いて 一番ショックを受けていたのは、皇子でもあるから」

「なら…… <ローズ>の手の甲にあるという紋章は、まさかセレディー皇子のものか？」

ナディア殿下の話では、問題ないと話しておられたが」

その問いかけに トッドは、頷く。

「皇子は、この滞在中で 本当に変わられたと思う。

確かに 覚悟は、決めていたかもしれないが それを本当に実行する為に 行動を起こし始めたのだから。

今までは、まだ迷いがあられたが…… もう それが、微塵もない」

「あれだけの決断力を持つておられながら 王位継承権を放棄するということか。

そりゃ 覚悟がいるだろう。

だが…… それは、いい傾向と言ってもいいだろうな？」

宰相は、苦笑しながら 閉じられた扉を見つめた。

「<ローズ>殿は、本当に この王宮で重宝されているようだ。

前に ナディア姫に 口説いていると凄い剣幕で勘違いされた事も あったのだから」

トッドの呟きに 宰相は、” だろうな？” と、微かに笑う。

「<ローズ>は、あいつに似ているという事もあって 陛下は、王妃様に彼女の事を話した。

その結果 侍女として召し上げられたんだ。

最初こそ 怪しいという目も多かったが……… 今では、いて当たり前
前の存在になっているのだからな？」

部屋の中からは、何かを押し殺したようなくぐもった声が聞こえてくる。

セレディは、石のように眠り続けている<ローズ>を見つめていた。

）
）
）
）

フラフラとした足取りで 近くへとよっていく。

落ちている手の甲には、自分が施した紋章が光っている。

「返事もせぬまま……旅立ってくれるな？」

そうなれば 僕は、どうすればいいのかわからないのだから」

皇子は、悲しげな表情を浮かべて 眠ったままのローズの顔を指で触れた。

その動きは、微かに戸惑っている。

触れてしまえば 消えてしまうのではないか という恐怖があるように……。

微かに触れる皮膚は、微かに熱を持っているので 生きている事は、わかった。

けれど 今の脳裏浮かんでくるのは、悲鳴で駆けつけた時に見た王妃は、侍女達に取り押さえられていたものの パニックに。

そして 地面に仰向けに倒れていたのは、<ローズ>。

服は、真っ赤に染まっており 背中には、剣で切り裂かれた痕が
…………。

急いで 抱き起こした時の血の気の失せた顔。

一緒に駆けつけてきたナディアは、悲鳴を上げて泣き叫んでいた王妃を押し退け すぐに彼女の元へと駆け寄った。

そして すぐに止血の術を施され この部屋へ…………。

後で 王直々に話を聞いたところ 刺客は、捕まっておらず 動機も未だに定かではない。

「まさか あの後直ぐに襲われたなんて…………ッ！

離れるべきじゃなかったんだ…………なのに…………なのに！

僕は…………僕は…………！！」

言葉は、最後まで紡がれなかった。

大粒の涙が、どんどん溢れてきて 話せる状況じゃなくなってしまったのだから。

予想

「陛下……………<ローズ>を襲った刺客ですが おそらく 以前王妃を狙った一派で間違いないです」

イリアは、真剣な表情を浮かべて 言った。

「<影>を使って 探りを入れてみたところ 連中も、ちょっと焦っているようですね？」

まさか <ローズ>が、意識不明のまま眠り続けているだなんて 思いもしなかったようですから」

ニヤリと笑う第二騎士に 第一騎士兼宰相代理のコーネリアは、眉根を寄せる。

「そんな顔をしないで下さいよ。」

連中は、刺客を使い<ローズ>を襲い 彼女を自分の思い通りの人形にするつもりだったのかもしれないわけ」

イリアの報告に ユウリィは、” どういう事だ？” と、訝しげな顔に。

この場には、王と宰相代理と騎士しかない。

王妃は、体調が著しくなく　自室で療養中。

宰相は、＜ローズ＞の部屋の前で警備中らしい。

「つまり　連中は、王妃や皇子に一番近づけるであろう　＜ローズ＞を駒に入れようとしたという事です。」

王妃のお気に入り皇子の世話役が、同一人物なんですから　奴等に取りつちゃ　仕事遂行に役立つと思ったんじゃないんですかね？」

「人形……って、まさか　意識を支配して　暗殺を実行させる為に？」

じゃあ　ミリアム様とセレディー皇子のどちらも、狙われたって事ですよね？

また　警戒態勢を強化しないと……………。

以前の事もあるんですから」

コーネリアは、溜息をつきながら　呟く。

「また 連中が、動き始めたとなると…… タイミングが悪いな？
隣国の動きが、怪しい時に……」

ユウリイの言葉に イリアも、心なしか複雑そうな顔になった。

「本当に申し訳ないです。」

ミイナが、身重な状態じゃなかったら…… 王妃に護衛が、完璧だ
っていうのに」

「いや お前が、悪いわけじゃない……」 「いえ イリアが
悪い」

王の言葉を遮って コーネリアが、厳しい口調で言い放つ。

「ミイナは、最初 全くイリアを相手にしていなかったのに……
あんなにしつこく言い寄ったりしてッ！

異性に対する免疫が、皆無だったミイナに取ったら アンタは、
危険人物だっってっていうのに！！

ミリアム様の計らいもあって 結婚は、認められたけれど 一番

重要な時に お傍で護衛できなくしてしまうだなんてッ！」

「リア……お前が、ミリアムの事を大切に思ってくれている事は嬉しいが 別に、イリアを責めているわけじゃない。

確かに ミイナ達は、王族を守る為だけに育てられた。

だが その人生までも 縛り付ける権利は、我々にはないんだ。

それに 宰相だって リーンと結婚しているじゃないか。

しかも……ちゃんと後継ぎまでいるんだからな？

シャーリーだって 最近、相手が見つかったらしいぞ？

人の人生は、誰かに決められたわけじゃない」

ニッコリと微笑む様子に コーネリアは、押し黙ってしまう。

顔では、笑っているが この王には、それに反論させない力をちゃんと持っているのだから。

「とにかく 今のところは、連中も下手な動きをしないでしよう。

<ローズ>が目を覚ますまでは……何もかもが、予想できずにいるんですからね？

これだけは、ご覚悟願いたい。

もしも 意識を取り戻した時………<ローズ>の意識が、連中に支配されていた場合 俺達は、彼女を斬ります」

いつになく真剣な口調の男に 女騎士も、唇を噛み締め 頷いている。

2人の反応に ユウリィは、苦渋な顔で ”好きにしろ” と、答えるしか出来なかった。

）
）
）
）

「何だか……厄介な事になってやしない？」

鉄砲玉を追いかけてきたら　こんな事になっているだなんて」

フードを被った女は、深く溜息をついた。

「いや　好都合だ。

標的が、こんな場所に足止めを食らっているんだから。

しばらくは、潜入しておこう。

何か起こる前に 全てを済ませるぞ?」

同じく闇色のフードを被っている男は、答える。

「だけど……警戒態勢は、強化されるみたいだし。

ちょっと 危なくない?

あいつの話じゃ……どこからともなく 噂が流れ始めているらしいけど?

本当に上手くいくのかしら?」

「何だ……弱音を吐くのか?

お前らしくないじゃない。

あの人に似て……何を考えているのか 全くわからない時があるのに」

男の発言に 女は、鼻を鳴らし そっぽ向いてしまう。

「あら……それは、貴方も同じ事なんじゃない?

他のみんなだって 何かしら 似通っている部分もあるんだから」

「おいおい……勘ねるな。」

お前の心配している事なら問題ない。

俺達には、コレがあるんだからな？」

男は、そう言って マントの中から水晶玉を取り出した。

「これが ある限り 王宮のみんなには、悟られる事がない。

勿論 正体も、バレないはずだ。

この王宮内には、これを俺達に託したあの人達に敵う人物が まだいないのだからな？」

男は、ニヤリと笑う。

その表情は、月明かりが逆光になっていた為 わからなかった。

「けど……目をつけられる可能性もあるんじゃない？」

警備体制が、強化された事で、少しでも怪しい素振りを見せれば
命取りになる可能性もあるし」

「まあ、事と次第によつては、あの人に協力を仰ぐ事も考えている
けど。」

さつき あいつの定時報告によれば、今のところ、変な風に話が
進んでいるわけじゃないらしい」

「なら、いいんだけど？」

あの間接的に協力者になってくれた子の話じゃ……脅迫文も内容
を増してきたそうだから、行動を起こすのも、早めにした方がいい
のかもしれない」

仕込み

「イリア様……………何だか、ご機嫌ですね？」

ぶしつけない言葉を受けて　口笛を吹いて廊下を歩いていたイリアは、振り返った。

そこには、銀のお盆を手に持っている下働きの少女が。

男は、その姿を見て　あからさまに　溜息をつく。

「何の用だ、シャルロッテ。」

お前は、自分の持ち場についているよ？

<ローズ>の襲撃で　それでも　厳重体制が、敷かれているんだからな？」

「勿論　わかっているつもりですよ？」

けど　こっちの身にもなって頂きたいな？」

思春期なのに　目の前では、兎がウヨウヨ……………」

物思いに耽る姿は、男ならば 誰もが抱きしめたくなるだろう。

けれど イリアには、妻がいるのと同時に 目の前にいるこの少女の姿をした悪魔には、そんな感情を抱く理由はない。

「その分 物に当たっているんだろう？」

この前も ルチア女史から、苦情を聞いた。

お前を なぜ殺さずに潜入させているのか ちゃんと理由を話したはずなんだがな？

それとも 俺の率いる<影>から抜けるか？」

男は、少し悪戯っぽく 笑った。

「何言ってるの？！」

居場所なんて とつくに無くなっているって事くらい アンタだ
って知っているでしょう？

元は、親に売られ 男とも女とも相手できるように仕込まれ……
… 拳句には、その技で刺客として育て上げられた。

それで ミリアム王妃の暗殺の為に王宮に送り込まれ 任務は、
失敗。

まあ あっちには、アンタの奥さんを含めた護衛がいるって事を知
れた事だけでも マシな結果だったんだろうけどね？」

「だが お前と言う駒を失った事は、痛手だと思うが？」

<影>に引き込んだのは、確かに俺だが お前の技量には、いつ
も驚かされるからな？」

だが 情報提供は、もったいぶらずに 逐一知らせてもらいたい」

イリアは、呆れたように 溜息をつく。

「何だ……………まだ怒ってたの？」

セレディー皇子のお遊び。

まあ……………トッドは、誰にも知られたくないようだったけど
ね？

前に会った時も すぐに気付かれたみたいで……………すごい目で睨
まれちゃったんだから」

「そりゃ……………俺も 女装して王宮を練り歩きたくなんかないな？」

しかも あいつの容姿は、目立つからなあ？

美人が睨むと 怖いぞ？」

イリアは、昔 共に背中を合わせあっていた友人を思い出す。

「だけど さつき…… 忠告してきたよ。

お遊びもいいけど 少しは、周りの事も考えるようにね？

そうしたら 意外にアツサリ…… 素直だったわけ？

まあ…… トッドは、すっごく心配しているようだったんだけど」

シャルロッテは、見た目こそ可愛らしげに 首を傾げてみせる。

イリアは、その仕草に溜息をつきながら 天井を見上げた。

「セレディー皇子は、誰よりも王族さ。

まあ…… 我が君主には、負けるだろうけど」

「ハハハ………そこは、買いかぶっているんじゃないか って

言いたいところだけどさ？

現に 自分の奥方の命を狙った刺客を、秘密裏に処刑した事にして
新たに生きる道を与えるだなんて ちよっとやそつとの覚悟じ
や、出来ないと思うけど？

だって 普通なら……………不穩因子は、絶つべきなんだからさ？

でも あの王は、それをせず……………違う人生を与えてくれた」

「ユウリイ王は、憎しみが繋がる事の哀しみを知っているからな？

俺の奥さんのミイナや他の特殊部隊のみんなも 色々な事情があつ
て……………他に拠り所がなかったって聞いている。

だけど 王の心を知って 忠誠を誓う事を選んだんだ……………勿論
俺もね？」

男は、真剣な眼差しで 視線をシャルロッテに返した。

琥珀色の瞳は、天井に輝く灯りが無くとも その輝きを失わない
だろう。

「他の国では、この国が何て呼ばれているか 知ってる？

どんな罪人でも受け入れる 偽善者の国。

少しでも同情心を見せれば　刺客を送り込むのは、簡単な事だつてさ？」

悪戯っぽく発言する少女に　イリアは、鼻で笑った。

「王は、そこまで甘い考えをしない。

確かに　道は与える。

だが　再び襲い掛かってきた時は、容赦が無いからな？

前に　生まれた時より　毒を飲み続けた事によつて　毒を発する体質になった女が、侍女として送り込まれてきて　宰相兄妹の母上殿が、殉死されたと聞く。

実は、その女に妹がいて　お前が<影>に入る前　刺客として王宮にやって来た……姉と同じく、毒体質でな？

そして　結局は、ミイナによつて阻止され　捕縛された。

王は、新たな生を歩む覚悟はあるかと問われたが……あの女は、一瞬の隙をついて　王に襲い掛かったんだ。

まあ　俺とコーネリアが、出るまでもなく　王の手で手打ちにされたがな？

ユウリイ王は、優しすぎる……ただ それだけだ」

「それは、この王宮の皆も同じ事でしょう？」

新参者も まるで家族のように受け入れるだなんて 普通、聞いた事がない。

……そろそろ 仕事に戻らないとね？」

シャルロットは、そう言い残すと 笑顔で立ち去っていった。

夢

わたしは、一体 どうしてしまったの？

<ローズ>は、何かに漂う感覚に陥りながら 考えていた。

辺りを見回してみる限り 色が全くない。

なぜ そう思ったのかは、全然わからずにいる。

見渡す限り 目の前には、霞んだものしか広がっていなかった。

ただ 自分の姿だけは、わかる。

服装は、清楚なワンピースで その色は、綺麗な淡い海の色。

手首には、薔薇の宝石のあるシルバーリングが……。

何だろう……懐かしい気がする

なぜかは、わからないが　そんな気がしてきた。

頭に触れてみると　髪の毛は、綺麗に纏め上げられている。

確証はないが　見事なまでに1つ1つ三つ編みを施され　上げられて
いるらしい。

ふと　手の甲にある薔薇の紋章を見つめて　ハッと目を見開く。

「何だか　わたしが、わたしじゃないようね？」

溜息をつきながら　<ローズ>は、溜息をついた。

「けれど　ここは、どこなの？」

わたし……………中庭で……………斬られた筈。

それに　何でこんな姿をしているのかしら……………」

状況が、掴めず　<ローズ>は、ワンピースに触れ　クルリと回
ってみる。

それは　ここが　君の夢の中だからだよ

どこからともなく　声が聞こえてきた。

急いで　振り返って見たものの　先ほど確認した通り　誰もいない。

今の姿は、記憶を失う前　君が普段着飾っていた姿

その言葉に　＜ローズ＞は、息を呑んだ。

「着飾る……って、それ相応の身分だったって事？！

ルチアさんが言うには　わたしは、それなりの上流貴族に適應する
礼儀作法が身に付いていると言っていたわ？

わたしは、記憶を失ってしまったから　どういう事なのかは、
全然わからないのだけど…………。

あなたは、知っているという事なのよね？」

その問いかけに　声は、微かに苦笑しているようだった。

そんなにせつかちにならないで？

君は、まず 時間を置くべきなんだ

「どついう事なの？」

わたしは、突然 刺客に背後から斬りつけられたようだったけれど
……それと関係があるの？」

あるよ。

連中は、君の中に別の人格を仕込んだ。

君は、まず それを追い出してもらわないといけない。

そうでなければ その人格は、彼らを害する存在だから……
…君は、殺されるだろう

物騒な話を聞いて <ローズ>は、顔を真っ青にさせてしまう。

「じゃあ……あの斬りつけてきた誰かが、わたしの中に変なのを
入れたって事なの？」

っていうより……なぜ、そんな事に？！

その刺客は、捕まったの？」

捕まっていない。

それ以前に 誰が、刺客なのかもわかっていない状況なんだからね？

まあ……厳戒態勢は、強化されたみたいだけど

どこか 呑気な言い草に <ローズ>は、思わず叫びそうになった。

けれど どこにいるのかもわからない相手に どう叫べというのだろうか？

王達は、君が考えている程 甘くないから 心配はいらない。

君は、この国に来た目的を 1つ果たしたんだから

その声に <ローズ>は、” どういう事？！” と 叫んだ。

「わたしが、この国に来た目的？！」

どうして……ただ 侍女をしてただけで 目的を果たしたとい

「う事になるの？」

夢の続き(前書き)

ちょっと、短いです。

夢の続き

本来ならば 王妃が、その刺客に襲われるはずだった（「え？」 <ローズ>）。

そして 王妃には、別人格が生まれてしまい 国は、廃れていく。

いくら 敵の手に意識が落ちてしまった存在でも 王は、王妃を手に掛ける事ができない。

勿論……連中は、王妃の周りにいる護衛にも 同じ攻撃を仕掛ける

「ちょっと、待ってよ？」

それじゃあ……わたしは、ダレなの？」

<ローズ>の質問に なぜかは、わからないが 声の主が、ほくそ笑んでいるように思えて仕方なかった。

まあ……それは、後のお楽しみかなあ？

今 僕が話せるのは、これだけだから。

さあ　今は、別人格を追いかけないとね？

一応　彼らが、下手に直ぐ意識が浮上しないように　呪を施してくれているから

「彼ら……って、そんなに信用できるの？」

大丈夫。

記憶を失う前の君の　最も信用していた存在だから。

そして　君が、記憶を代償に　この国を訪れた事を、少なからず嘆いている。

なぜかは、わかるかい？

「もしかして　何の相談も無しに　行動を起こしたから？」

成る程………自覚は、あるみたいだね？

苦笑しながら　言われてしまったので　＜ローズ＞は、膨れっ面になってしまう。

自分には、声の相手の姿が見えないが 彼には、自分の姿が見えるらしい。

そんな顔しないで？

折角の顔が、台無しになってしまうよ？

そう言い残すと 声は、何度か耳を傾けてみたが 聞こえなくなつた。

<ローズ>は、どうしたものか……と、息をついてから とにかく歩き出す。

報告

「依然として <ローズ>は、意識を取り戻す気配がありません」

ナディアは、白衣姿のままで 王の間に入るなり こう告げた。

その報告を受けて ユウリイは、頭を抱えてしまう。

「このままでは、いかんのだがな？」

本当に……………どうすればいいのか」

悲しんでいる兄の様子に 妹も、言葉が見つからない。

この場に控えているのは、第二騎士と王妃付きの侍女の1人 リー
ン……………そして王宮医師のナディア殿下。

「ですけど……………着替えさせる役の侍女の話で ちょっと不可解な話を聞いたのですが」

リーンの発言に 一同は、目を細める。

「意識が戻る気配は、ないそうなのですが……………深い夢の中で、何かを探しているそうなのです。」

私は、実際に目にしたわけじゃないのですけど　誰かを探しているようだ」と

「それって　<ローズ>が記憶を失っているのと　関係があるって事かな？」

だって……………記憶が、全く無いなんて　通常は、ありえないから。

何かの代償にしているんじゃないか……………って、考え始めていたところなんだけど」

イリアは、真剣な表情を浮かべて　呟く。

「代償……………？」

まるで　契約したかのような話ね？

確かに　薔薇の痣は、そっちに部類じゃ　関係あるかもしれないけれど……………。

でも　アレは、そんな負の感情はなかったわ？

どちらかっていうと………<ローズ>の心を守っているようだから」

ナディアは、訝しげな顔になった。

「<影>から 何か報告は、あるか？」

王の言葉に イリアは、天井を見上げて 指を鳴らした。

すると その場に 飴色の髪をした少女が、ふんわりと飛び降りてくる。

「ご報告しますね？」

今のところ 王宮内に 不審な動きをする輩は、いません。

まあ <ローズ>の一件がありますから………みんな 大分心配していますけど」

「ロツテ………まさか 貴方は、こんなにも馴染んでいるだなんて 未だに信じられないわ？」

私 アンタに殺されかけたっていうのに」

ナディアは、溜息をついて 言う。

「ハハハ……そんな警戒しないで下さい。

今は、無力な新米侍女なんですから」

シャルトツテは、ニッコリと微笑んだ。

その笑みに 誰も突っ込みいれない。

話が進まなくなってしまうことを、理解しているから。

「今のところ <ローズ>を襲った可能性のある連中は、身の振り方を考えて 潜んでいますね？

彼女が目覚めますまで事が起こらないっていう イリア様の考えは、当たっていると思いますよ？

まあ………目が覚めた時 どうなっているのかは、予想不可能なんだけど」

「何か その潜む者に動きがあれば？」

ユウリイは、真剣な顔で問う。

「すぐに察知できるよう 呪を仕掛けました。

少しでも動き出せば 察知できます。

けれど これだけは、ご了承願いたい。

今回ばかりは、今までのように 秘密裏に処理できないかもしれないかもしれない」

シャルロッテの断言に 王を含めた面々は、唇を噛む。

「だけど 王妃も運が良かったと思う」

先ほどの真剣な口調と打って変わって 茶化すように言うく影の
一員に イリアは、侍女を睨みつけた。

「この国で黒髪なのは、ミリアム王妃とくローズ>のみ。

外の国の連中は、記憶を失った女が 侍女として しかも黒髪だ
なんて、知られていると思う？

それに 王妃の脱走癖は、隣国にも伝えられて程 有名な話題。

<ローズ>が王宮に上がる前までは、何度も それを見越したかのように 刺客が送り込まれた」

その言葉に 一同は、愕然としてしまう。

「リン……前に 侍女の話題になっていたよね？」

<ローズ>と王妃は、背丈も似ているから 同じ格好をして 後ろから見れば 見分けが付かないかもしれない って」

その問いかけに 皆の視線が、金髪の侍女に集中する。

「ええ その話題は、前々からあったわね？」

だけど 本当ならば ミリアム様が、<ローズ>のように斬りつけられていたという事なのかしら？」

いつも穏やかな顔立ちからは、殺気が立ち込めていた。

シャルロッテは、こうまでも切り替えが可能なのか……と、唾を飲み込む。

「多分……その可能性が、高い。」

セレディー皇子を狙う可能性も 捨てきれないけれど……王妃の意識を支配してしまえば この国は、破滅するだろうからね？

だけど 失敗した事は、連中も自覚しているのに 仕掛けてこない」

「つまり その意識を乗っ取って人形にするっていう術は、相当な時間を要して成り立つモノって事？」

ナディアの言葉に シャルロッテは、”その通り”と、息をつく。

「まあ 監視は、続けますよ？」

だって あいつらには、何かと借りがありますからね？」

「無茶はするなよ？」

イリアは、指を鳴らしている少女の頭をワシワシと掴んだ。

シャルロッテは、膨れっ面になりながら その手を振り払う。

「旗から見ていると 初々しい恋人のようですね？」

ミイナに報告しておきましょうか？」

リーンは、朗らかに笑みを浮かべた。

「止めてくれよッ！」

男相手に 恋人なんてありえないだろう？！

しかも 女装が趣味な！！」

顔色を変えて叫ぶイリアに 少女は、目元をヒクヒクさせる。

「別に趣味ってわけじゃありませんってッ！」

体格的に こっちの方が、潜入しやすいだけで！！」

夢と現実

「うーん……周りが、何にも見えないのに　どうやって探せばいいのかしら？」

ここが、わたしの夢の中だと言うのなら　考えたものが、魔法のように出てきてもいいのに」

<ローズ>は、途方に暮れてしまっていた。

目の前には、やはり　霞だけしかない。

「あの声は、わたしが　どこの誰なのかを知っているようだったわ？　もしかして　その誰かを捕まえたら……教えてくれるかも……！」

<ローズ>は、真剣な表情になって　拳を握り締める。

そして　手の甲に見える薔薇の紋章に視線を向けた。

「後……セレディー皇子の真意を確かめないと。」

よくわかんないけど　まるで……求愛の印みたいで　恥ずかしかったんだよね？

前に　リンさんとミイナさんに　プロポーズの話題を振った時
手の甲をやたらと撫でてたもん。

訳もわからなくしていたんなら　ちゃんとそれを改めてもらわないと……そこら中で女の子達が、大騒ぎになるもんね？

だって　音は、とっても真面目な第一皇子様なんだから」

<ローズ>は、息について　両手を頬に触れてみると　異様に熱を感じる。

考えただけで　真っ赤になってしまったのかもしれない。

あの真剣な眼差しを思い出すと　ある期待をしてしまうそうにな
ってしまうのだから。

「セレディー皇子の決意は、とても素晴らしい事だわ？

だって　普通は、王族である身分を捨てようだなんて　考えない
はずだし。

それにしても　トッド様も、ご存知だったのかしら？

皇子が、「ご自分の身分を返上するといつ覚悟を……」

）
）
）
）

「<ローズ>……………ずっと目を覚まさないのね？」

栗毛の巻き毛を靡かせた 少しお腹の出ている女性は、哀しげに眠り続けている<ローズ>の手を握った。

彼女は、王妃付きの侍女の1人 ミイナ。

今は、妊娠を控えている為 一線を引いている。

「本当は、ミリアム様が狙われた可能性が高いと伺ったけれど……
…この事 あの方は、ご存知なの？」

その問いかけを受けて 同じ部屋にいるシャルロットは、肩を竦めてしまう。

「お知らせしたら お体に悪い。

それだけでなくも 最初に <ローズ>を発見したのは、王妃様達だったんだから。

リン達の話だと ルチアのお陰で……………食事だけでも 取っ
てらえているそうんだけどね？

やっぱり 食べ物が、喉を通らなくなってきたみたいで」

その話を聞いて ミイナの表情に翳が。

「<ローズ>には、彼女の初めての休暇の時 ネオに紹介されたわ？
本当に驚いたの。

彼にソックリだったから……………」

「それは、イリア様達も言ってた。

実際に会った事は、なかったんだけど 王妃の兄上ってどんな人
だったの？」

不思議そうな顔をしている シャルロッテに ミイナは、微かに
目を伏せた。

「アーロンは、とても腕の立つ剣士だったわ。

それこそ 陛下の第一騎士になる人材だったから。

温厚で 誰にでも優しい……………そして、守るべく者を持てる力を駆使して 戦う方だった」

「聞いた話じゃ……………自らの命を顧みず この地に眠っていた神を自分の命と引き換えに 目覚めさせたそうだけど？」

「ええ 誰もが あの時、敗北を覚悟した。

国が滅ぶのならば 自分達も……………ってね？

けれど アーロンは、最後まで諦めなかったのよ。

詳しくは、知らないんだけど トッドも 実は、一枚咬んでいて……………何かの代償を払ったらしいわ？

当の本人は、国を逃げ出した罪人として恨まれた方がいいからって……………知っているのは、ごく少数なんだけど。

勿論……………ナディア殿下は、ご存じないわ？

知っていたら あんなに 彼を責められるはずがないから」

ミイナの何かありげな発言に シャルロットは、首を傾げる。

「もしかして……………ナディア殿下って、そのアーロンっ人の恋人だ

つたわけ？

あんなに美人なのに 浮いた話 全然 ないもんね？」

「確かに お似合いの2人だったわ？

その前での戦争において アーロンは、＜迅速の騎士＞の称号を王の名において与えられていたから。

ナディア殿下との身分も 問題ないはずだったの。

まあ……アーロンは、妹命みたいな性格だったから 殿下のお気持ちに気が付いていなかったかもね？」

「うーん……後 気になるのは、やっぱり トッドとの関係かな？

ナディア殿下が怒っているのは、単に あの銀髪ヤローが、国を捨てて逃げ出した臆病者っていう認識からだけじゃない気がするんだけど」

ミイナは、少女の問いかけに 息をつく。

「トッドとは、最初から 衝突が絶えなかったのよ……殿下は。

うちの人も ある意味 よくわからない性格をしていたけれど
トッドは、とにかく始終無言でしょう？

だけど……剣の腕は、アーロンに遅れを取らない実力者だった。

流れの傭兵として 様々な危険な場所に仕事を重ねてきていた事もあつて 知識もあつたわね？

殿下は、その全てを否定なさっていたけれど……」

「単に 一目惚れしたって事？

だけど 初恋の人が、実力で負けるはずがない……ってね？

そももって 相手は、国を裏切っているから その感情は、あつてはならないもの。

だから あんなに厳しいわけだ」

シャルロツテの納得の言葉に ミイナは、”そういう事よ”と、苦笑。

そして 無意識に お腹に手を当てている。

話し合い

「具合は、どうだ ミリアム」

「大丈夫ですわ。」

そんな風に 真面目な顔をしていると らしくありませんね?」

ユウリィは、その言葉を受けて 言葉を詰まらせてしまった。

ミリアムは、そんな夫の反応に 面白そうに微笑んでいる。

「貴方は、真面目な顔をなさるよりも そういう情けない顔の方が似合っています」

「それは、誉められているのか?

何だか………そうは、思えないのけれど」

王は、どこか複雑そうな表情を浮かべて ベットに上半身だけを起こしている王妃の横に座った。

今この部屋にいるのは、ミリアムとユウリイだけだ。

後の者には、部屋の外で待機させている。

どうしても……………話さなければならない事があるから……………。

皆は、そのユウリイの覚悟に気が付いているのか　部屋を下がる時、相当　心配そうな顔をしていた。

ミリアムも、何かを悟っているのか　溜息をついてしまっているらしい。

「陛下……………最初に申し上げますが　真名は、わたくしが持つておりますわ？」

これは、歴代の王妃の務めなんですもの……………「だがッ！」

「ミリアム……………君の今の状態は、とても危険なんだぞ?!」

確かに　王妃は、王の真名を護る。

だが　自分の体の事も考えて欲しいんだ……………。

<ローズ>の一件で……………君は、相当　ショックを受けてしまって

いただろう?」

その言葉に 王妃は、今にも泣き出しそうな顔になってしまふ。

「もしかしたら……あの子は、わたくしと間違えられた可能性もあるのでしょうか?」

みんなは、隠し事が嫌いですから 教えてくれました」

唇を噛み締めている妻に 王は、長い三つ編みになっている黒髪を手にとって 口付けを落とす。

「刺客については、イリアが<影>を使って 探らせている。

今は、とにかく 互いに冷戦期間だ。

ミリアム……君は、今が一番大切な時期なのだから ゆっくり休まないと」

「ええ……<ローズ>が目を覚ますまでの間でしょう?」

万が一、あの子が正気を失っていれば 斬り捨てられてしまうのね?

わたくし……どうしたらいいのかしら?」

「ナディアが、過去に起こった事例を探し出そうと セレディー皇子やトッドと一緒に躍起になっている。

真名を護る王妃を 連中は、長年に渡り 意識を乗っ取ろうと様々な手段を取ってきたらしいからね？」

王の言葉に 王妃は、小さく俯く。

「アーロンお兄様なら……………どうなさっていたかしら。

<ローズ>を救うには、どうしたんでしょう」

「ああ……………彼なら <ローズ>にとって一番安全な策を考えられていただろうね？」

勿論 誰も損しないやり方で。

まあ……………アーロンは、人を驚かせる事が得意だったから 全てを種明かししてはくれなかっただろうけど」

夫の言葉に 妻は、目を伏せるのみ。

「大丈夫だ……………ミリアム。

<ローズ>は、絶対に守るから。

君は、俺の真名とお腹にいる新しい命を守って欲しい」

ミリアムは、ユウリィに抱きしめられながら言われた言葉に 涙を流す。

「承りましたわ、陛下」

王妃の答えを聞いて 王は、満足そうに微笑んだ。

それを見越したように ドアがノックされた。

「陛下……………イリアです。」

無作法かもしれませんが お話を聞いて欲しいんですけど」

イリアの声は、どこかいつもの茶化す色が含まれていない。

その声色に ユウリィは、少し戸惑ったが 妻の真剣な顔を見て
”入れ”と 許可する。

「王妃………寝所への乱入をお許し下さい」

イリアは、真面目な口調で 頭を垂れた。

「それ相応の 緊急事態が起こったというわけなのでしょう？
お話して」

ミアムの言葉に 第二騎士は、頷く。

「老師が、この国に入り込んでいる」

く
く
く
く

暗闇の中 1つの影が、微かな光をも避けながら 駆けていた。

その足取りは、風のように 全てを薙ぎ払っていく。

影が通った場所は、黒ずんでいき 花々も枯れてしまう。

ふと 影が足を止めた。

何かと鉢合わせたかのように 立ち止まっているらしい。

「中庭にいる黒髪の女を襲うよう命じたのは、アンタだね？」

あの子の背中の傷は、特別趣向の太刀だ。

まあ 何を勘違いしたのか……………標的だったはずの王妃ではなく
侍女が倒れる事になってしまったけれど」

「確かに 予想外だったが……………計画に支障はない。

あの娘が目覚ませば……………何もかもが上手くいくだろうからな？

だが ずっと お前の行方を探していたのに……………どこにいた？」

低い声が、どこからともなく 聞こえてくる。

その声に 影は、小さく息をつく。

「ずっと 死んだと思っていたんじゃないの？」

死体も晒されていたのだから……………」

「あの王は、思ったよりも……我々の存在に早い段階で気が付いたのでは？」

お前を捨て駒にするしかなかった。

この生業をしている以上……全てを失うわけには、いかないのだよ。

我々は、家族なのだからね？」

「そりゃあそうだ。

なり手は、いくらでもいるんだし？

だからこそ 捨て身の技を仕込むわけでしょ？

戦争で家族を亡くした子や世界に絶望した子供。

色々な闇を植え付けるのが、アンタのお得意なんだから」

「お前は、我々を裏切ったな？

生きること絶望していたお前に居場所を与えた 我を………」

声は、さらに低くなっていく。

「この老師を裏切った罪は、その身を切り刻んでも 足りん。

お前の所業によつて 多くのお前の兄弟達が任務を失敗し……処
刑されたのだからな？

なのに なぜだ？

貴様は、なぜ……生きている？」

その声に 影は、何も答えなかった。

いや 答えられないのだ。

「お前が、のうのうとこの国で生き残っている中……お前が、兄
と慕っていた者は無様に標的の騎士に首を撥ねられたぞ？」

お前を慕っていたあの娘も、夜伽と偽り寝首を掻こうとしたのに
辱めを受け……そのまま殺された。

中には、晒し首として……標を上げられた者も大勢いるぞ？

貴様は、それを聞いても まだ 恥じだと思わんのか？」

「何が言いたいわけ？」

確かに　まだ闇のそこにいた頃は、それを恥じて死を選んでいたかもね？

だけど……………守りたいと思った。

その存在が出来たから……………この国を守りたいと思ったから。

ただの刺客だった頃は、いつも虚しい事ばかりだったけど　今は、ちゃんと充実しているの。

だから　邪魔はさせない」

「それがお前の決意か……………」

声は、どこか皮肉を嘲笑っている。

ザッザザ……………と背後で　何かが揺れた。

影は、瞬時に振り返ろうとしたが　次の瞬間　目の前の光景が、歪んだ。

「……………しまった……………」

後悔と共に 意識は、そのまま闇の中に消えた。

「さあ……………君は、戻りなさい。」

このシャルロッテの代わりに……………」

その言葉を受けて フードの中から満面の笑みを浮かべた 少女が
顔を出す。

ある一室にて

「兄上……どうなさったのです？」

ずっと、黙り込んでおられるようですが……」

その問いかけに 男は、不機嫌そうに顔を上げた。

「珍しいですね？」

兄上が、そのような顔をなさるだなんて……何時以来でしょうか」

「陛下……御自分のお立場をお考え下さいませ。

我は、一臣下です。

そのように お言葉をお掛けなさいますな。

古くからいる者は、何も申し上げませんが 他の者の混乱を招く可能性があります」

切り返しに 少し着飾っている男は、悲しげに肩を竦めてしまふ。

その表情は、どこか寂しい。

「昔は、もっと親密でしたのに……………何だか寂しいですよ。

確かに 私は、王になりました。

でも 貴方の弟である事には変わりありません。

なので……………そのように他人行儀をしないで下さい。

これは これは……………王としての貴方への命令ですッ！」

どこか戸惑いを隠せないままの強気な発言に 男は、小さく息をついて ” わかった、努力しよう ” と、苦笑する。

「だが……………それは、プライベートの時だけだ。

公務中は、今までの態度を貫かせてもらう。

でなければ 他の者達に示しが付かないからな？」

「兄上は、変なところで周りの目を気にしていますね？

まあ……………幼少時代が、特殊でしたから 仕方ありませんけど。

それで？

まだ……奥方は、ご実家から戻られていないんですか？

何でしたら お迎えに行ってもよろしいと思いますよ？

いつも 働きすぎるというくらいに仕事をこなしているのですから
誰も文句が言えません。

みんな……貴方が働きすぎだと嘆いていましたよ？」

「反対に……戻ってくるなと泣かれるかもな？」

みんな、不甲斐なさ過ぎる。

あれで、よく……今まで国を守る位置にっていたものだ」

その発言に 王は、吹き出した。

「まあ……それは、同感ですね？」

貴方を当時 守っていた騎士は、あまりそういう場に踏み込もうと
していませんでしたが 兄上は、色々と思うところがあるようだ。

けれど 兄上の扱きで 軍の力が増していることは、確かです。

みんな……素晴らしい隊長を得たと喜んでおりましたよ？

ちまたでも 貴方の業績は、留まることなく噂になっていきますからね？」

「その反面では、妻に見放されたと囁かれているのも知っているぞ？

かの国の皇女は、本来ならば お前の妃になるはずではなかったのか？…………とな？

彼女も 元より、そのつもりだったようだし…………俺を見るたびに 睨みつけてきていた」

「だったら 本当のことを話してしまえばいいんじゃないんですか？

そうすれば 誤解も解けるはずですよ」

「アレが、そう簡単に俺の話に耳を傾けると思うか？

日に日に…………俺の存在そのものを無視するようになっていくというのにッ！

娘を出産してから 更にそれが増した。

今回も、あちらの王と王妃が取り成さねば…………手紙も送るつもりないだろう」

男が、悪態をつく　弟は、ニツコリと微笑んだ。

「本当に愛しておられないのなら　奥方は、ずっと兄上の傍にあられなかったと思いますよ？」

今回の家出の原因は、何だったんです？

前は、兄上が仕事ばかりに身を寄せているからというのが理由でしたが……………」

弟の発言に　臣下は、小さく息をついた。

「呼んでしまったらしいんだ……………彼女の名前を。」

<ローズ>　とな？

そしたら　その翌日……………アレは、手紙だけを残して　娘と一緒に、実家に戻ってしまった。

何でも……………寝言で彼女を呼んでいたらしい」

兄の告白を聞いて　若き王は、開いた口が塞がらない。

「僕も　王妃に女心がわからないのかと何度も罵られますけど……………
…兄上の言動で奥方が怒っている事は、丸わかりですよ？」

当たり前じゃないですか……自分の夫が、自分とは違う女性の名前を出せば 誰だって……」

「わかってるさ……そんな事、お前に言われなくてもな？」

午後から あちらに向かうつもりだ。

一筋縄でいかないことは、わかっているから 王や王妃方にも協力してもらうつもりだしな？」

「その間は、騎士団のみんなは 骨休みですね？」

まあ……兄上が帰ってきた後の恐ろしさを前回の一件で身に染みているでしょうから 鍛錬は、欠かさないはずですよ」

「その心配は、要らない。」

今から連中に抜き打ちの体力測定をしよう。

俺が休暇中に どれだけ今日から進歩できているか 楽しみだ」

満面の笑みを残して 男は、立ち去る。

部屋に取り残された王は、兄の様子に苦笑しながら 兵士達に心か

ら同情の念を送り 異国にいる義姉の事を頭に思い浮かべた。

再び、この城に戻ってこられますように と。

ある一室にて（後書き）

誰と誰の会話なのかは、最後の方で明かしたいと思います。

疑惑 1

最初に違和感を感じたのは、幼いコルネオだった。

口では、上手く説明できないが 何かがおかしい。

「ねえ……………ぜったいに おかしいよ？」

コルネオは、懸命に母のリーンに訴える。

「いつものロッテじゃない。

なんだか おかしいんだよ？」

涙目になりながら話す我が子に 母は、戸惑いを隠せない。

そして 苦渋な中で考えた末 他の侍女達に相談もせず 罨を張る事に。

これは、危険な賭けかもしれない。

だが 我が子の直感を鵜呑みに出来ないのだ。

決して、自分の子供に対する鼻屑ではなく その能力を知っているからこそその行動。

「シャルロッテ………ちょっと、いいかしら？」

不自然にならないように声を掛けると シャルロッテは、すぐに足を止めて 振り返った。

普段ならば 見て見ぬフリをしなければならない立場。

顔見知りだということを、他の使用人達に知られるわけにはいかないのだから。

けれど 今は、そんな形振りを考える事も無い。

周りのシャルロッテと一緒に仕事をしていた侍女達は、ちょっと驚きを隠せていないのも無理も無いだろう。

自分達の憧れとも言つべき王妃付きの侍女に声を掛けられているの

だから。

「お仕事中にごめんなさいね？」

彼女に、少し お話したい事があるの。

悪いけれど 代わりにシャルロットの仕事もこなしてくれるかしら？」

リーンは、営業スマイルとも言わべき微笑を向けて 彼女達を遠ざける。

これをすれば 大概の者達は、思考が停止して 言うがままになっ
てくれるのだ。

そして、その言葉通り シャルロットと一緒にいた子達は、

「ええ そうね？」

何か……………あつたの？」

旗から見れば コルネオが言ったように 違和感があるようには
思えない。

けれど 何かがおかしく思える。

「イリア様からは、何も聞いていないけど？」

もしかして さっき………出払っている間に、変更事項でもした？」

その問いかけに リーンは、ニツコリと微笑んだ。

「いつもいつも、変更になっているから パニックになるかもしれないけどね？」

「ただ………イリア様もそうだけど 私達も 彼方の事を信頼しているわ？」

誰よりも 危険を承知で任務を随行しているんですもの」

「お世辞はいいよ。」

それで………？

何が変更になったの？」

どこか痺れを切らしている様子に リーンは、少し言葉を選ぶ事に。

「隣国が不穏な動きをしているという事は、彼方も聞いているでしょう？」

それに先立って 陛下達が出陣する事になったということも」

「まあ……………知っているね？」

戦える騎士や兵士達は、出払ってしまっただから……………王宮内は、潜入しているく影>やリーン達のような護衛が力を発揮するんだもん。

特に 今回は、陛下の真名をお守りしている王妃様だけでなく 来賓のセレディー皇子もいるしね？」

「セレディー皇子は、トッドが命を賭けて守るはずよ。

それが、主に忠誠を誓った騎士の定めなんですもの」

真剣な表情を浮かべている侍女の様子に 少女のような顔立ちのく影>の一員は、ただ黙り込んでいるだけ。

「勿論 それは、騎士だけでなく 彼方や私達も同じね？」

与えられた事をこなすんですもの。

まあ………失敗してしまう事もあるわ？

だって 人間なんだしね？」

シャルロッテは、目の前で語っているリーンを見つめた。

心の中では、彼女の真意が読めない。

だが なぜだか………焦りを隠せない自分がここにいる。

見据えてきている瞳は、言い逃れを許してくれないだろう。

これが 数年に渡り 王妃を守ってきた者の強みなのかもしれない。

元々は、自分と同じ刺客に成り下がった者の血筋のはずなのに………

リーンは、自分に向けられている殺気に 確信を持った。

やはり ネオの勘は正しかったみたいね？

「彼方………何者？」

本物のシャルロッテは、どこにいるの？」

その言葉を受けて シャルロッテは、クスクスと笑う。

リーンは、その反応に 眉根を寄せる。

「何がおかしいのかしら？」

彼方が偽者なのだとしたら 本物は、どこかにいるはずでしょう？

そんなに似ているという事は、血筋？

イリア様から 国内で老師が目撃されたという話を聞いているわ？

シャルロッテは、その話を聞いて 自分から確かめに向かった。

そして 彼方は戻ってきたわね？」

「驚いた。

バレないと思っていたのに まさか………こんな早い段階で知られてしまうだなんて。

老師の話していた通り この国の王は、思っていたよりも頭がキレるみたいだ。

周りの国じゃ この国が生き残っているのは、運がいいだけって話しだけど……… 実は、王やその周りの臣下達がよく動いているからってことだね？

やっぱり 潰すには、周りからすべきなのかもしれない」

シャルロッテに成り済ましていた者の発言に 王妃付き侍女は、息を呑んだ。

その口調からは、焦りが全く見られない。

この状況は、自分にとって不利だとも思っていないのだろう。

「忘れていたようにだけど 潜入しているのは、1人じゃない。

じゃないと あの<ローズ>とかいう侍女を襲えないからね？

まあ……… 本来の目的からは、ズレてしまったけれど 計画に支障は無いの」

言葉に反論する前に リーンの意識は、何かに引っ張られてしまった。

それが何なのかを自覚した時には、時既におそく 意識を保つ事は出来ない。

背後に立っていた人物に気が付けなかった自分に苦虫を嚙むような表情を浮かべて そのままその場に崩れ込んだ。

）
）
）
）

「……………は？！

リーンが家に戻ってこない？」

＜ローズ＞の眠る部屋の前で寝ずの番をしていた宰相は、息子が泣きながら抱きついてきた事で 驚きを隠せなかった。

その背後には、心配で堪らないという シャーリーが立ち尽くしている。

「最後に見たのは、シャルロットらしいの。

それで 少し話してから別れたそうなんだけど……………その後、誰にも姿を見られていないわ。

イリア様にも話を通してきたところなんだけど　王宮内に気配を感じられないって」

普段は見られないほど困惑している侍女に　宰相は、唇を噛む。

それだけ　状況が悪いという事なのだから。

「陛下とミリアム様には、あまりご心配を掛けるわけにも行かないから　まだお話していないの。」

でも　貴方には、まず先に知らせるべきだと思って……………」

「ええ　教えていただいて感謝しよう。」

だが　それでも……………状況は変わらない。

それで　リーンは、何かに巻き込まれたと判断すべきなのかもしれないな」

男は、眼鏡を拭きながら　呟いた。

この仕草は、焦っている証拠だ。

「ネオの話だと……シャルロッテがおかしいそうなんだけど。」

でも 私は、そんな違和感を感じなかった。

もしそうだとしても……イリア様が気が付かないはずがないしね？

けど……リーンは、ネオの勘を信じて行動を起こしたのかもしれない」

「つまり その起こした行動で、相手側にとって何か不利な事隣
連れ浚われた可能性がある？」

宰相の言葉に シャーリーは、小さく頷く。

その反応に 男は、綺麗な顔を歪める。

「あの馬鹿ッ！」

いつになったら 学習能力が養われる？！

ミリアム様もミリアム様だが……リーンも大概 後先考えない行
動ばかりじゃないかッ！」

「うーん……それは、庇いたて出来ないわね？」

見た目は、大人しいのに　私達の中じゃ……一番　考えたらず
ぐに行動に移す子だから」

シャーリーは、従妹を庇う言葉が見つからない。

それほどまで　今までの体験が脳裏に浮かび上がってくるのだから。

「<ローズ>を襲った者の事もありますし　1人で行動しないよ
うにすべきだと侍女頭にも進言したんですけど　ちよっと、難しい
かもしれない。」

王宮での仕事は、何かと予定通りに進まないものだから」

「ああ　そうだろうな？

だが　注意はしておいて欲しい。

もしかしたら　陛下と王妃の周りにいる者が狙われている可能性も
あるからな？」

その言葉を受けて　シャーリーは、”御意”と言って　そのまま
従妹の息子を抱きかかえて　立ち去った。

疑惑2

「王妃付きの侍女が、1人行方不明になった?!」

セレディーは、その話を聞いて 驚きを隠せなかった。

しかも その人物が、宰相の奥方だというのだから 困惑を隠せない。

「リーンは、少し抜けている部分こそあるかもしれないけど とて
も身体能力が高いのに……。」

今まで 何があるかと…… 族の手に落ちた事などなかったわ?

ましてや ネオを妊娠していた頃でも」

ナディアも、ショックを隠せないまま持っていた本を取り落として
しまっている。

トッドは、何も聞こえていないかのように 平然としているらしい。

「詳しい事は、まだわかっていないけど そのお陰で…… 兄さん

は、凄い事になっているわ？

王と王妃には、その事を伏せておくにしても 特にセレディー皇子の耳には入れておくべきだと思って。

ナディア殿下……………あのお2人には、ご内密にお願い致します。

兄と話し合った結果 リーンは、しばらくの間 外での守りに従事していると申し上げる事になっているので」

宰相代理を務めているコーネリアの言葉に 一同は、頷く。

「ところで その宰相の奥方は、<ローズ>を襲った刺客に捕らえられた可能性はあるのかな？」

皇子の問いかけに コーネリアの表情が固くなった。

「その可能性は、最も高いです。

今は、こちら側で 内通者がいる可能性を洗っており その矢先の出来事なので……………あまり話す事は不可能ですが」

まるで突き放すような言い方だが セレディーは、気に留めていない。

ただ 今も眠り続けている愛しい少女の姿が思い浮かぶのみ。

「だが リーンの事だ。」

何か 手がかりの残しているのでは？

そうではなくては………王妃の楯にはなれやしない」

トッドが口を開いた。

その発言に ナディアは、眉根を寄せている。

「アンタは、相変わらず無神経な発言をするだなんてッ！

皇子は、なぜ こんな男を傍に置いているのです?!」

怒りに満ちた様子で詰め寄られ セレディーは、息を呑んだ。

そんな様子を見つめて 宰相代理は、小さく溜息をついてしまう。

「トッドは、亡き母上が認めた男です ナディア殿下。」

確かに国の危機に亡命したのは、誉められる行為ではないでしょう。けれど 何か理由があると思う」

皇子の発言に ナディアは、赤みの掛かった金髪を少し逆立てた。

「アーロンは、最期までこの男の子とを信じていました。

なのに トッドは、戻ってこなかった。

結果として……アーロンは、自らの命を代償にして この地に眠っていた土地神を目覚めさせたわ？

トッド 貴方は、何も話そうとしないけれど 一体 アーロンとどんな密約を交わしたのかしたね？」

その発言に 銀髪の男は、何も答えようとしなない。

ただ 黙って目の前にいる女を見ているだけなのだから。

「ナディア……今は、お願いだから トッドと喧嘩しないで。

昔ならともかく 今は、国交問題になりえるんだから」

コーネリアは、幼友達の立場で 発言する。

その言葉を受けて ナディアは、肩を竦めてしまう。

元々は、王位を持っていたにしても 今は、それを返上してしまっている為 国王の第一騎士は、自分よりも身分が上になっているのだから。

しかも 相手は、幼い頃から怒らせると頭の上がない姉的存在。

「トツド……………貴方もね？」

アンタの無駄口を叩かないっていう性格は、馬鹿げた噂に振り回されている見習騎士達や衛兵達にも見習わせたいほどのものよ？

だけど 時が来れば……………アーンとの約束を聞かせて欲しい。

ユウリイも、アンタが恐れをなしてこの国を逃げ出しただなんて思っちゃいないんだから。

現に アーロンが命を代償にして直ぐ……………援軍が来た。

あれは、ただの偶然ではない。

後でミリアムが、セレミア様に聞いたそうだけど 貴方が懇願したと聞いたわ？」

コーネリアの言葉を聞いて ナディアは、驚いたように 目を大きく見開く。

セレディーは、その話を聞いていたらしく どこか心配そうな顔になっていた。

「とにかく 皇子……………この王宮内は、今までと違い 危険となっております。

故……………お1人で行動なさないよう。

姿を変えても 危険は変わりませんから」

念を押すように言われ 皇子は、肩を竦めてしまふ。

<ローズ>の提案してくれていた押し伸びは、いつの間にか 王宮内の殆どの人々に知れ渡っていた。

最初こそは、誰もが驚きを隠せなかったが セレディーの境遇を思い直し 姿を偽っていた時が本心であると思うようになったらしい。

その為 誰も、自分達を騙していたなどと思ってもらえないそうだ。

逆に 親近感が沸いたと 誰もが皇子に対して 以前のような感情を持たなくなっている。

もしかしたら それが、<ローズ>の狙いだったのかもしれない。

「それでは、先程のお話 ご理解ください。

では 失礼致します」

コーネリアは、一礼すると そのまま部屋を後にした。

その後姿を追って ナディアは、再び 散らばった本を拾い集めている銀髪の男に視線を向ける。

トッドは、いつもの騎士の服ではなく 動きやすい服装だ。

勿論 セレディー皇子を守るための剣は、腰に常備してある。

「時が来れば……貴方は、アーロンを見殺しにした理由を公にするのね？」

その日こそ 貴方の最期だと思いなさい」

その言葉を受け トッドは、初めてナディアを見た。

視線を受けて 女は、少し怯んだ様子だったが すぐに睨み返す。

2人のそんな様子を見つめて セレディーは、小さく溜息をつき散らばっている他の飼料となる本を探し出した。

ふと 机の下にある本に手を伸ばす。

そこには、見知らぬ文字が本の背表紙にまで続いているらしい。

「これは……………禁書だな？」

それも 随分と古いものだ。

なぜ このような本が、ここに……………？」

セレディーは、不用意に文字の部分に触れないようにしながら 手に取る。

疑惑3

何か冷たいものが、顔に触れた気がして 女は目を覚ました。

急いで起き上がろうとするが 全身から激痛が走る。

呻き声を上げながら上半身だけでも起こすと 自分がどこか日の当たらない場所に横たわっていた事に気が付く。

そして 自分が覚醒するきっかけとなったのは、天井から滴っている水だ。

神経を集中させ 闇の中に目を利かせてみるが 見定める事が難しい。

おそらく 何らかの結界を張られているのだろう。

だとしたら 自分が、ここにいる事に 仲間が気が付く事も不可能に近い。

体の状態を確認してみるが 拘束はされていなかった。

逃げられないと確信を持たれているのかもしれないが　状況は悪いだろう。

「とにかく　ここがどこなのかわからないと」

痛みを堪えながら　立ち上がる。

少しばかり眩暈がしたが　気のせいだと思い込む事に。

そうする事で　少しは、動ける範囲が広がるのだから。

「やっぱり　一人で突っ走ったのが悪かったのかしら？

絶対　戻ったら　あの人が、怒るでしょうね？」

リーンは、乱れた髪の毛を直しながら　小さく溜息をつく。

衣服は、おそらくここに連れて来られた時に乱れたのだろう。

「あのシャルロッテに成り済ましている子の他に……王宮内には、

危険因子がいる。

おそらく <ローズ>を襲ったのも そいつの仕業だわ？

こんな事になるんだったら……………ミイナくらいには、相談すべきだったかしら？

だけど 時間も無かったし……………」

リーンは、今更 自分の後先考えずに行動に移す性格を恨めしい。

子供の頃は、誰もが微笑ましく見守ってくれていたり 少しばかり厳しく説教してくれる人もいた。

けれど 今の自分は、もう成人しており 大切な主を守る楯でもあるのだ。

それなのに その責務を怠り、このような無様な事態に陥ってしまうなど。

「ミリアム様には、心より謝らないと……………」。

だって あの方は、私達の事を本当の家族のように思ってくれているというのに「

リーンは、暗い天井を見上げる。

見渡す限り この部屋には、出入り口はない。

天井は、暗いが 少しでも隙間から光が漏れており 自分は、そこからここに落とされたのだろう。

全身に激痛が走っているのも その為だ。

おそらく 身体能力が高いことを熟知されており それを防ぐ為
かもしれない。

確かに 痛みは忘れようと出来るかもしれないが あれだけの高
さは、いくらなんでも出る事は不可能なのだから。

「どうしたものかしら」

リーンは、絶望にも似た声で呟いた。

}

}

}

}

「本当に バレないと思っていたの？」

本気で呆れるわ」

イリアは、身重の妻の目の前に座って 肩を竦めていた。

その隣には、心配そうな顔をしているコルネオと彼を抱きかかえているシャーリーだ。

ミイナは、夫の前に仁王立ちになって 怒り顔。

「今は、妊娠している為に一線を引いているかもしれないけれど私も、同じ立場だわ?!」

それなのに 事もあるうにも…… 同じ任務に付く仲間が連れ去られたという話を夫の貴方ではなく 噂で知る事になるだなんて!!」

「誰だよ、話したのッ！」

リーンの話は、陛下や王妃にも秘密なんだぞ?!」

イリアは、普段のおふざけな様子ではなく 少し焦っている。

「多分　それが、老師の作戦なんじゃない？」

ミリアム様の性格を考えた上での」

妻の発言に　男は、目を大きく見開く。

シャーリーも、ハツとしたように　息を呑んだ。

「つまり　ミリアム様が、自分が狙われた為に　私達が危険になれば　自分から王宮を飛び出すと思われるって事？」

確かに　今は、その悪い癖が収まっているけど……………」

シャーリーの言葉に　ミイナは、難しい顔で頷いた。

「現に　シャルロッテの時だって、似たような感じだった。

あの時は、標的がナディア殿下だったけど。

作戦を考えているのは、あの老師だとしたら　ありえない話じゃないわ？」

＜ローズ＞の襲撃だって　元々は、ミリアム様本人を狙っていたとしても　精神攻撃に切り替えたただけだとしたら？」

「確かに 王妃は、相当 気に病んでいる。

自分とくローズ>が間違えられたんじゃないかって。

だとしたら とんでもないじゃないか……………」

イリアは、唾を飲み込んで 顔を蒼ざめた。

「陛下とミリアム様にリーンの事を話さないのは、今よりも厄介な展開になるだけね？」

あまり ショックを与えないよう……………真実を話すべきなんじゃない？

セレディー皇子とトッドには、リーンの事を話してあるんでしょう？

だったら お話すべきだと思うけど」

「だけど 今のミリアム様に話せば とんでもない事になるかもしれないわ？」

シャーリーは、哀しげな表情を浮かべる。

「今 話さなければ……………もっと安静にしなければならぬ時に、

後先考えずに飛び出すんじゃない？

今は、まだ 支えようと思えば 陛下が付いている。

けれど 隣国での戦争が更に悪化すれば……陛下は、軍を引き連れて 仲裁に入らなければならない。

もしも その時を狙って……ミリアム様の耳に今回の一件が入れば？」

それを聞いて 滅多に顔色を変えないイリアが、立ち上がって 今にも倒れそうな顔色になった。

シャーリーに至っては、小刻みに震えだして 膝に抱いているコルネオが、今にも落ちそうだった。

「ちょっと、待ってくれよ？！」

まるで 王妃の懐妊を知っていたかのような展開ぶりじゃないかッ！

ナディア殿下が、その兆候を発表したのって つい最近の事だぞ？

だけど 今回の老師の計画は、どう考えたって 前々から決まっているような段取り……もしか………「逐一 その情報を流している内通者がいる」

イリアの発言を遮るように ミイナが断言する。

「あんまり その可能性を考えたくないけど……………それしか考えられないわ？」

<ローズ>の一件からは、王宮内の者を洗い直しているそうだけど古くから務めている者の近況も調べるべきなんじゃない？

隣国にも、この国の内の者に対する甘さが知れ渡っている。

もしかしたら それを逆手に取られているのかもしれない」

「こりゃ……………王妃に今のうちに話さざる得ないじゃないか。

しかも 内通者の一件もあるし……………慎重に進まないと」

頭を抱えている夫の尻目に ミイナは、未だに凍り付いている同僚に目を向けた。

「……………という事だから ミリアム様の心のケアをお願いします。

リーンが連れ去られたっていう事からして 貴女が老師と繋がっている可能性はない。

仲間が裏切っているだなんて あんまり考えたくない事だけど……………私達は、何の為に存在しているのかをよく思い出しなさい？

旗から見れば 残酷な立場にいるかもしれないけど……………今の私達の幸せがあるのは、陛下とミリアム様の恩恵があるからこそ」

「わかってるわよ、ミイナ。

非情にならなければならぬって事ぐらい……………承知している。

今のここでの話 宰相には、通しておくべきよね？」

「そうね……………もしも 宰相が裏切り者なのなら……………愛する妻を
殺したりしない。」

もっと 人害と称すべきやり方で ターゲットを地獄の底に突き落とすやり方をするはずだわ？」

2人の会話を聞いて イリアは、小さく溜息をついてしまう。

「いくらなんでも……………宰相をそう言いますか？」

あの人だって、人の子だっていうのに……………」

コルネオは、大人の会話を意味も無く 首を傾げて見つめている。

疑惑 4

王宮内は、衝撃を受けた。

王妃のお気に入りだったくローズ>が襲われた事件に続き 王妃付きの侍女の1人が、何者かに連れ去られたという話が公になったのだ。

最初こそは、ミリアムもショックのあまり寝込んでしまっていたが 現在は、少しずつ回復してきているらしい。

けれど 人々の不安は、留まる事を知らないだろう。

特に 下働きの者達の中で 自分も狙われるのではないかと恐怖心に駆られてしまった者が出てきて 持ち場を放棄してしまっているのだから。

その中で一番 波風がキツイのは、やはり使用人達をまとめているルチアだった。

「本当に厄介な事になってしまいましたね？」

まさか <ローズ>さんだけでなく……リンさんまでも。

次は、シャーリーさんか……休業中のミイナさん辺りが狙われそうですね？

王妃様も、やっと御懐妊なさったのに 問題が出てきて、大変だ」

「アナスタシア……貴女 最近 シャルロッテの口の悪さが出てきたようですね？」

あの子の場合は、そこまで酷く言いませんが」

ルチアの言葉に 赤毛を縦ロールにしている少女は、頬を膨らませた。

「だって 本当の事じゃないですか。

それに こうやって口に出していないと……不安になってくるんですよ。」

普段は、リンさんが緊張している空気をいつも和やかにしてくれるのに」

哀しげな顔をしているアナスタシアに ルチアも、小さく溜息をつく。

「それは、どこの持ち場でも似たような感じですね？」

特に シャーリーの落胆振りは、相当なものですから……………。

慣れていない子達は、その変わり様に戸惑いを隠せていませんし。

ミイナがいてくれば 少しは、マシになっていたかもしれないけど…………… さすがに 妊婦を危険な場所に引き入れるわけにも行きませんかからね？

王妃様の精神を追い詰める要素が増えるだけになってしまう」

「まったく…………… 誰が、糸を引いているんでしょうね？」

こんな卑劣な事を計画するだなんてッ！

見つけて、とつちめてやらないと 気がすまないですよ!!」

アナスタシアの発言に ルチアは、眉間に皺を寄せた。

「無謀な事には、首を突っ込まないように。」

それでもなくても ここ最近、人の出入りが激しい。

しかも そんな中での事件です。

顔見知りでも 油断をすべきではないでしょう」

その言葉に 侍女は、目を大きく見開く。

「まさか……………新参者ではなく 古株の中に……………刺客がいるかもしれないってことですか？」

確かに その可能性は、ないわけじゃないですけど……………。

嫌ですよ……………仕事仲間を疑わないといけないだなんて!!

確かに 様子がおかしい子が、いますけど……………」

赤毛の侍女の発言に 侍女頭は、真面目な顔になった。

「誰です……………それはッ！」

事と次第によっては、報告しなければ……………」

「<ローズ>さんと同時期くらいに王宮入りした下級貴族の子ですよ。」

ほら……………本来なら、王宮まで来れない筈なんですけど 先王の弟君による推薦もありましたし 容姿と教養に恵まれて 見習いになった……………」

「ああ オリヴィアですね？」

彼女の身元は、しっかりしているはずですよ？

礼儀正しいですし、マナーもしっかりしていますから ミリアム様や陛下の評価も高い子です。

ただ いつも俯いてばかりいるのが……玉に瑕なのですが……。

彼女のどこが、おかしいのでしょうか？」

「彼女……何だか 何かに怯えているみたいなんですよね？」

定期的に 外部からの手紙を受け取っているみたいなんですけど……

……日に日に、元気がなくなってきているみたいなんですよ。

元々、食が細かったんですけど 今回の事が明るみになってから……

……更にやつれてきて」

それを聞いて ルチアは、神妙な表情になる。

「確か 彼女が、王宮に上がって直ぐの頃……ミイナの代わりに入った毒見役が、1人 体調不良を訴えていましたね？」

ナディア殿下の診察の結果 その者は、命に別状もなく 今も仕

事を続けておりますし。

まあ その食事は、万が一のことを考え 膳に運ばれる事はありませんでしたか」

「彼女が、食事の中に薬を紛れ込ませた可能性があるって事ですか？」

目を大きく見開いているアナスタシアの質問に 年老いた侍女は、頷く事も戸惑ってしまう。

「そうであつては欲しくありませんが 可能性はあります。

一応 彼女に話を聞く必要がありますね？」

けれど オリヴィアに話を聞く事は叶わなかった。

彼女は、その日 遺体となつて発見されたのだから。

警告

「こんな場所に呼び出して 何のつもりだ？

姿を現したらどうだッ！」

イリアは、険しさを隠せずに 声を張り上げた。

けれど 周りを見回してみる限り 何の気配もない。

男は、苦虫を噛み締める気持ちで 舌打ちする。

その手には、特殊な細工を施されえている手紙が握り潰されていた。

何とかして 手紙を送りつけてきた者を探ろうとしたのに 何の記憶を読み取る事も出来なかったのだ。

手紙に気が付いたのは、通例の訓練を終え <ローズ>を見舞い
自宅の寝室に足を踏み入れた時。

妊娠中の為に 妻は、深く寝入っていた為 その存在にも気が付い

ていないはず。

「こんな断言しているんだから、確固たる証拠があるということな
んだろう?!」

話があるのならば 目の前に姿を晒すんだッ!」

その声に反応したのか 微かだが 息を呑む音が…………。

どうやら この場にいるのは、自分を含めて 1人だけではないら
しい。

「随分と強気だな?

あまりに色々な事が起き過ぎて 感情的になっているだけだと思っ
ていたが」

男の声が聞こえてきた。

「つまり それだけの実践を交えてきたってことでしょう?

あんまり、調子に乗っていると グサリとやられちゃうかもしれ
ないわよ?」

今度は、女の声もだ。

振り返ってみると 黒いフードで顔を隠した男と女が、物陰から出てくる。

イリアは、その姿を確認して 訝しげな顔になった。

男の方は、体格がよく フードの中には、いくつかの武器を隠しているのだろう。

女の方も、スラリとしており 小柄だが 物腰からして、相当な手練だと見受けられた。

「なぜ 俺に伝言を寄越した？」

それが、一番の疑問だ。

確かに王を守る第二騎士という称号を与えられている。

けれど 城の中には、未だに自分を疑っている者も少なくないのだから。

「話を冷静に聞いて 感情に流される事なく 正しく判断できる
だろうという こちらの一致した考えだ。

普段は、ふざけている部分もあるかもしれないが <影>の長を
担っている点でも 有利になるだろうと判断した」

無機質に言い放つ言葉に イリアは、息を呑む。

どこか緊張している自分に 舌打ちしてしまう。

目の前にいる男は、どう考えたって自分よりも年下なはずな
のに どうして ここまで緊張してしまうのだろうか？

「そこまで 気を張らなくても大丈夫ですよ？

我々は、彼方方の敵ではありませんから。

懷に隠している短剣をお納めくださいますか？」

女の発言に イリアは、マントの下に隠していた短剣を取り出す。

万が一の場合 捨て身で相手に一撃を与えるつもりだったのだ。

「ならば 説明してもらいたいものだ。

この手紙には、<ローズ>の一件と王妃を狙う一派の情報を提供するとあったな？

事と次第によつては、拘束しなければならないッ！」

第二騎士の威厳ありな言葉に 男女2人は、苦笑気味な様子。

「おいおい……ここまで 頑固だったっけ？

気前のいい兄ちゃんだった気がしたのに……」

男は、どこか情けなさそうに 小さく溜息をつく。

「仕方がないんじゃない？

私達の今の姿を考えたらね？

立場が逆なら アンタの場合……何の躊躇もなく、切り倒していると思うんだけど？」

女も 苦笑しながら イリアに聞こえないよう 呟いた。

そんな2人の様子に 騎士は、訝しげな色を隠さない。

「信じてもらうには、こっちの手の内を見せる必要があるのかもしれないぞ？」

第三者の声が聞こえて イリアは、ハツとしたように 振り返る。

すると そこには、先に姿を現した男女に加え 同じくフードで顔を隠した者達が姿を現した。

先に発言した男の声は、どこか威厳が伴う。

「こりゃ……………驚いたな？」

お前らは、影で出てこないのかと思っていたが。

他の奴等は、まだ 待機中なんだろう？」

「事情が変わったのよ。」

彼に協力を仰ぐには、明らかにしなければならぬでしょう?」

威厳の声の持ち主である男の隣から 背の高い女性が出てきた。

その言葉を受けて 自分に対して挑戦的だった男も冷静に諭していた女も、まるで側仕えのように 下がっていく。

「今から話す内容は、他の方々に ご内密にして頂きたい。

まだ 時が来たわけではないので……………」

「納得のいくことならね?

アンタが、この無作法な連中の親玉のようだけど まるで どこぞの王族のような待遇だねえ?」

初めて会った時のユウリイを思い出す。

今でも 似たような感じで 少しは、王らしい行動をするようになっていくけど。

それに 気のせいかな?

昔の知り合い友ダブるんだけどなあ?」

ニヤリと笑いながら話すイリアに 目の前に立つ男は、ゆっくりとフードを外した。

その瞬間 騎士の顔色が、一気に驚愕の色に変わる。

目の前に見えている光景に 驚きを隠せないらしい。

「え……………まさか 血筋ってわけ?!

おいおい ありえないじゃないかッ!」

「全くありえない話じゃないわ?

私達が、この場にいる事がその証拠。

まだ 存在していない場合もあるけど 他の仲間も、違う場所で潜んでいるわ?」

気が付けば 全員が、フードを取り除いていた。

イリアは、もう疑う余地がないと判断して 大きく溜息をつく。

「ここまでされたんじゃ 疑えばただの馬鹿じゃないか。

それで……………？

何を話してくれるんだ？」

その問いかけに フードを外した男は、”警告です”と 低い声を発した。

「周りの人々に注意を払ってください。

特に 信頼している部下の方々に……………。

彼らは、確かに貴方方を裏切るつもりなどないでしょうが
連中
は狡猾です。

利用できるのならば なんでも使ってみせる。

それが、どんなに卑劣で残酷な結果になってもです」

「言われるまでもなく 警戒している。

<ローズ>の一件もあるからね？」

どこか苛立っている男に 一行は、顔を見合わせてしまふ。

「口に出すのは、簡単だ。

だが 本当に疑っているわけじゃないだろう？

頭ではわかっているかもしれないが 心の中では信じたいと思っている。

特に アンタの場合は、自分の部下を本当に信じているから 疑いたくないんだ」

イリアは、それを聞いて 眉根を寄せる。

「シャルロッテという侍女に気を付けて。

彼女は、何かを企んでいる。

宰相閣下の奥方が、行方知れずになったのも 関わっているのかもしれない」

出会い

「皇子……先ほど 陛下から使者が送られてまいりました」

その言葉を受けて セレディーは、息を呑んだ。

言葉を発したトッドは、仏頂面で平然としていた。

「父上からは、何か問題でも？」

お前は、表情が読みづらいから 何が言いたいのか真意がわからないが」

実のところ 聞かなくても 何を言われてきてきているのかは、
わかっている。

王宮で起こった一件については、既に自国に伝わっているはずなの
だから。

皇子の質問に 銀髪の男は、書状らしきものを本が山積みになっ
ている机の上に置いた。

セレディーは、無言でそれを手に取り 読み始める。

そして 小さく溜息をついた。

「父上達が心配するのもわからなくもないが 僕は帰るつもりなどない。

トッド…… 使者にそう伝えてくれ。

どうせ 使いツ走りの騎士見習いの誰かなんだろう？

今頃 水を飲みつくしているころだろう。

途中にある砂漠は、相当 体力を奪うからな？

少しばかり休憩させてやれ」

「承りました そう伝えておきましょう。

あの様子からして 少し強く言えば 引き下がるでしょうから」

主の命令口調に 騎士は、軽く頭を下げる。

「すまないな お前に言いづらいことを言わせてしまって……」。

それだけでなく お前は、他の騎士達に恐れられているというのに」

どこか悲しげな顔をしているセレディーに 男は、小さく苦笑。

「私はそう思っていないよ。」

陛下や王妃も、貴方の気持ちを尊重させてやってほしいそうなので。

それに そのように言い遣わされていなくとも 私は皇子の心を優先させて頂きますよ」

少年は、それを聞いて 照れ笑い。

けれど フツとどこか遠くに視線を注ぐ。

「ただ 長くは留まれないだろう。」

でも >ローズくが目覚めた時 一緒にいたい。

どんな返事をされても ずっとこのままなのは、嫌なんだ。

僕は、彼女と出逢った事で 自分を見直すことが出来たと思う。

だから たとえどんな結果になっても 結末を見届けたい」

「ねえ……セレディーおうじは、>ローズくがおきたら かえつてしまうのですか？」

まえのおうじは、にがてでしたけど いまのおうじは、ボクきらいじゃないのに」

どこか寂しげさを持つ幼い子供の声に 2人は、ハツとしたように入り口に視線を向けた。

そこには、大きくまのぬいぐるみを背負っているコルネオの姿が。

「どうして……お前が王宮^{ロイヤル}に?！」

セレディーは、驚きを隠せず 声を張り上げてしまう。

父は仕事に忙しく その上に母親が行方知れずになってしまい 現在は、ミイナの家に預けられていたはずだ。

「まさか 1人でここまで来たのか?！」

護衛もつけずに?。」

年上に少年の怒声に似た声色に　コルネオは、背負っていたくまを
思い切り抱きしめる。

「1人じゃないです。

きれいなおねえさんが、てをつないでいっしょにきてくれたんです
から。

ほら……あそこに……あれ？」

少年が振り返った先には、誰もいなかった。

トッドは、険しい表情を浮かべて　廊下に駆け出していくが　人
影などない。

「ネオ……どんな女性だったんだ？」

顔を見たんだろう？」

肩を掴んで聞いてくる皇子に　宰相の息子は、目をパチクリ。

「とってもきれいなおねえさんでしたッ！

トッドとおなじ　かみのいろがシルバーでした。

みのこなしが、とてもゆうがで ひんもあつて。

なまえは イブとなのってました」

）
）
）
）
）

「ちよつと イブ?!

貴女、どこに行っていたのよッ!」

フードをスッポリと被っている女は、呆れたように ノコノコと歩いてきた人物に声を発した。

先ほどかで話を聞いていたらしいイリアは、その顔を確認してさらに溜息をついてしまっているらしい。

それは無理もないだろう。

先に聞いた話と照らし合わせれば 嫌でもわかってしまうのだから。

「可愛らしい頃の坊やが、迷子になってしまっていてえ……………送り

届けていたのお。

あの頃が、最絶頂だったんですね？

皆様方が、あんなに昔の姿を懐かしむのも無理ありませんよお」

シミジミと語るイブと呼ばれた女のの言葉を聞いて イリアが何とも言えない様子でいる事と顔を隠した男が口元をヒクヒクとさせているが 他は、吹き出してしまっていた。

「イブ…………それは、ある意味 禁句だってッ！」

ケラケラと笑い声が響く中 叫び声が、木霊する。

夢と不安

「別人格って どんな姿形をしているのかしら？」

今のわたしのよう……… <ローズ>ではない姿ってことなのよね？

何だか 頭がこんがらがってきそうな気がするわ」

<ローズ>は、自分の着ている服の裾に触れて 小さく溜息をついた。

触ってみる限り 上質の絹が使われている。

ミリアムが身に纏っている物よりも、上等かもしれない。

そのことを考えると 何だか恐れ多くなってしまう。

結い上げられた髪の毛も、何だか自分のものではないような気がした。

この状態で 王宮のみんなに会っても 誰だかわかってもらえないだろう。

自分の今の姿を見たわけではないが 何だか落ち着かない。

「> 声くは、記憶を失う前のわたしを知っているようだったわ？

それに 協力者もいるってことなのよね？

信用できるのかは、別にして……今は、わたしに出来る事をしな
いとッ！

うん……………そうよ！！

わたしが、別人格をこの中で追い出さないと ずっとこのままなん
だものッ！

ずっと眠ったままなんて、絶対に嫌だし そんなことになってしま
えば ミリアム様達が悲しむものね？

きつと 現実の世界では、みんなが暗躍しているんだから……………
少しでも役に立たないとッ！」

<ローズ>は、真剣な表情を浮かべて 再び 先の見えない道を見
つめた。

すると 何か影のようなものが、視線の先を横行していく。

一瞬だった為、何かわからなかったものの　この空間で目が覚めて、初めて見た自分以外の存在だ。

「待つてッ！」

<ローズ>は、迷うことなく　その後を追いかけていった。

）
）
）
）

「……………様？」

ミリアム様……………お目覚めですか？

体調が戻られていないのでしたら 今日の公務を休むようにと陛下が心配しておられましたか」

ミリアムは、聞き慣れた声に反応して ゆっくりと意識を浮上させた。

「今……………夢の中で<ローズ>を見た気がしたわ？」

何だか どこかの王族のような衣装を着て どこかを歩いていたの」

まだ寝ぼけているような発言に シャーリーは、眉根を細める。

「前から不思議だとは、思っていたけれど あの子……どこかの国の姫君なのかもしれない。」

記憶は失ってしまっても 身に纏う高貴な雰囲気は、消えるはずが無いもの。

あの子は、わたくしにないものを持っているのだから」

「何を言っているの？」

ミリアムにも、素晴らしいものがあるじゃないッ！」

あまりにも弱気な発言に シャーリーの声が荒々しく響き渡る。

「そんな弱気にならないで頂戴？」

私達が、駒になったのだって 貴女の人徳ゆえなんだから。

…………… 失礼しました、ミリアム様。

夢見が悪かったようですし 今日はお休み下さいませ」

シャーリーは、一息つくと そのまま寝室を後にした。

1人取り残されたミリアムは、唇を噛み締め そっと小さく膨らんで
できているお腹を撫でる。

「お願いよ………お願いだから、これ以上 わたくしの大切なものを奪わないで？」

どうか みんなが、無事で過ごし 未来を迎えられますように……

……」

悲痛な声を発する王妃の声だけが、部屋の中に小さく嗚咽と共に聞こえてきた。

部屋を出たシャーリーは、それを耳にして 小さく溜息をつき、歩き出す。

ある部屋にて (前書き)

ある一室にて 関係です

ある部屋にて

1人の女性が涙目になって　一室で膝を抱えていた。

「もう　知らないわ?!」

どうして……あの方は、わたくしのことを見て下さらないのかしら。

あんな切実に名を呼ぶくらいに想い馳せる方がおられるのならば
どうして　正室に据えたというの?」

自分の口から出てきた言葉に　女は、涙の止め方がわからない。

止め処なく溢れてくる滴に　頬はどんどん濡れてく。

「最初は、何度も希望を持った……」。

けれど　あの方のお心には、想う方がおられる。

どんな方なのかとみんなに聞いても　誰も教えてもくれない。

ただ……王位を継ぐ可能性をお捨てになる勇気を与えて下さった
ということしか」

膝から顔を上げると 艶やかなウェーブの掛かった黒髪が、垂れてくる。

結い上げていたはずだが ずっと俯いていた為に落ちてきてしまったらしい。

「姫……閣下には、色々と事情があるのだと思いますわ？」

確かに 性格に問題があるかもしれません」

ずっと空気のように徹していたお付の女の1人が、重い口を開いた。

他の女官達は、何たる事をするのかというように その発言者を驚愕の目で見つめている。

けれど 今のこの状況でこういった言葉が許されるのは、幼馴染として幼い頃から共に育ったからかもしれない。

「最初は、弟君の元に嫁ぐと思い込んで 初恋だったあの方への思いを封印するつもりだったわ？」

でも すぐにあの方の妻になれると思って 胸が躍ったというの

に…………。

素気ないのも、若輩者^{じやくはい}と未だに見下してくる貴族の方々と渡り合っているのだから…………と 何度も仕方がないと諦めた…………。

あの方は、陛下に既に寵愛を一身に受けられた王妃様がおられるから 仕方なくわたくしを正室に迎えたに過ぎないのよ。

ずっと 独り身でいたから、隠れ蓑^{かくみの}に丁度いいと思われたんでしょね？

お父様とお母様に恩義としても 親交を深める事で他の貴族達も文句が言えなかったらしいし………… 名ばかりの妻でしかないのよ」

やっと10代を終えたばかりの時しか過ごしていない為か どこか拗ねたような儚い表情を浮かべた。

そんな若い主人の様子に 幼馴染の女以外の女官達は、息を呑んだ。

彼女が嫁いでからどのような環境で過ごしたのかわからない為 どこか戸惑ってしまう。

そんな皆の様子に 何か知っている女官は、小さく溜息をつく。

「差し出がましいかもしれませんが 閣下は、姫^{メアリー}の事を愛しておら

れます。

小さな姫君のことも、本当に可愛がられておられるではありませんか。

確かに お噂では、様々な推測が飛び交っておりますが 今の貴女の地位を揺るがす存在は、姿を現そつとしない幻影まぼろしでしかありません」

幼馴染の発言に メアリーは、唇を噛む。

それは、幼い頃からの納得がいかない時にする彼女の癖。

「姫は、メアリー もう少し 周りの目も気にすべきです。

閣下には、閣下の立場があり 色々と苦勞されているとの話なのですから。

こう何度も 祖国に舞い戻る事が続けば 同盟を結んでいる他国に、変な噂を広めてしまうだけになってしまふのですよ?。」

その言葉に 他の者達は、オロオロとするばかり。

「貴女ジャンヌには、わたくしの気持ちなどわからないわ?。」

幼さを残す姫君は、銀髪の幼馴染である女官を睨んだ。

「簡単に愛する方を手に入れて 幸せをも手にしているんですもの。わたくしには、それが不可能なの……………だって あの方には、大切な方がおられるんだから」

「あら……………私は、それなりに努力したんですよ？」

彼は、無口で 御自分の心を他人に悟らせないようにする事を昔から得意としていたそうですから。

それと反対に 閣下は、わかりやすいじゃありませんか……………。

姫と喧嘩した翌日^{メアリ}なんか 鬼のような訓練が待っているそうなんですからねえ？」

「それは、陛下からお話を窺ったことがあるわ？」

だから あまり他の方々に迷惑にならないように控えている方なのよ？

だって 貴女の片割れさんにも、泣きつかれてしまったんだもの」

「ああ……………あのヘタれの言葉は、別に聞かなくても大丈夫ですよ。

どうせ 女の子の後ばかり追いかけてばかりいるから、体力がついていないだけなんだもの。

お父様だつて あの成長振りに頭を抱えてしまっているらしいしねえ？」

口元をくつと上げる仕草に 何人かの女官が、色めき立つ。

「ジャックの場合は、まだ精神的に子供だから仕方がないわ？

だつて 初恋をしたことがないそうなんだもの。

でも あの方は、違うと思うの。

あの容姿だし わたくしと結婚する数年前までは、王位継承者として 社交などに関することを学んでいたこともあつて、様々な貴族のご婦人方とも関係を持っていたはず。

きつと その中のどなたかに、報われない想いを抱かれているのよ。

じゃなかったら あんなに想いを込めて名前を呼べるはずがないわ？

女は、幼馴染の発言に膨れっ面になりながら 目を細めた。

そんな同年齢の主人の様子に 女官は、微笑ましそうに口元を緩め

る。

「以前 夜会に出席なさった時 プレイボーイと有名な貴族の男性が言い寄ってこられた時、庇って下さったのでしょうか？」

「^{メアリー}姫^{アリー}つてば 顔を真っ赤になさって、話して下さいさったじゃありませんか。」

仕方なく奥方に迎えた相手を、そこまでして庇うでしょうか？

私なら そういう感情を持っていないのでしたら、勝手にしろと言わんばかりに知らん振りするわ？」

その質問に 女主人は、返す言葉が見つからない。

ふと その時、扉のノック音が聞こえた。

「やあ 可愛い妹が出戻ってきていると聞いて、顔を出しに来たよ？」

随分と声を張り上げているようだったけど また ジャンヌに言い負かされていたの？」

優しい微笑が扉の向こうから広がるのが見えて 女は、嬉しそうに相手に抱きつく。

「エルディーお兄様、お久しぶりですわ!？」

興奮気味な兄妹の様子に幼馴染の女官は、呆れたように咳払いをしようとしたものの 先を越されてしまう。

「限られた時間です。」

公務の方は、まだ終わっていないのですからね？」

どこか固い口調に 赤みの掛かった金髪の青年は、肩を竦めた。

「少しくらいはいいじゃないか」

「貴方が、姫様^{メアリー}に逢わないと 資料の内容が頭に入れないと駄々を捏ねるから許したのでしょうか？」

そうでなければ あの馬鹿^{ジャック}に対応を押し付けてまで、執務室を出る必要もなかったということになりますか？」

「宰相代理………何だか、父親に似てきたんじゃない？」

君の母上達が、嘆かれていたよ？

昔は、あんなに愛らしかったのに……って」

その発言を聞いて 厳つい顔をしている背の高いプラチナブロンドの若い男は、眉根を寄せる。

「あまり関係のないことでは？」

メアリー
姫様も、あまり部屋に籠られずに 散策などなされるとよろしいのでは？」

今日は、天気が良いですし 中庭の花園は、美しく咲き乱れておりますよ？」

王妃様自慢の花園は、1年中様々な花が咲いているのを覚えておられますか？」

「子供の頃からの遊び場でしたもんねえ？」

採取閣下代理は、随分とお父上に似てきてしまわれたようですけど
お」

ジャンヌがわざと語尾を延ばすと 閣下代理は、険しい顔をして先に部屋を後にした。

「相変わらずね？」

お兄様も、苦勞なさっているのではなくて？

いつも宰相閣下代理と同じ執務室に籠られているのでしょうか？」

心配そうに聞く妹に エルディーは、苦笑する。

「あいつは、真面目すぎるだけさ。

根本的には、少し天邪鬼で不器用なだけ。

限界が近くなれば イヴが見計ったかのようにお茶を運んでくれるから大丈夫さ。

まあ………逆にジャックの機嫌が悪くなってしまうんだけどね？」

エルディーは、優しい微笑を妹に向けてから 他の女官達にも軽く挨拶し、そのまま部屋を後にした。

動き1

「まだ 足取りが掴めないのか？」

ユウリイは、神妙な表情を浮かべて 溜息混じりに言った。

その言葉を受けて 臣下達は、申し訳なさそうな顔をしている。

「仕方ありません。

老師は、自分に行き着く証拠を残さない。

以前の一件でも それは、身を持って知っているではありませんか」

宰相代理を務めているコーネリアは、真剣な顔で発言した。

「わかってるさ………そのことはね？

だけど 何だか不安なんだ。

ミリアムの今の状態があるからかもしれないけれど 嫌な予感がするんだよ

「まあ……………わからなくてもいいわね？」

それに あの老師の事だから……………今回も卑劣な手段を使ってくる。
手始めに<ローズ>ってわけね？」

神妙な表情を浮かべて呟く女騎士に 王は、唇を噛んだ。

「リアは、リーンの失踪も 老師が関わっていると思うか？」

その質問を受けて コーネリアは、” ええ ” と 頷く。

「彼女は、前の時でも真っ先に老師の手段に気が付いていたわ？」

後先考えずに突っ走るのは、問題だけど 何気に足跡を残す。

今回は、ネオが話を聞いてくれていて 助かったわ？」

「シャルロッテの一件か。」

確か あの偽者塔の上に閉じ込めているんだっただな？」

「そうよ……………あそこは、周りが断崖絶壁になっているし 色々な

罌が仕掛けられているから リーン達のように訓練されていなければ、どんなに打たれ強い軍人だって 生きて帰れない。

危険な賭けに出るよりは、安全な建物の中で結果を待つ方が利巧だわ。

どんなに老師に忠誠を誓っているにしても そこまで忠義を貫く恩義は、あるはずがないもの。

ロツテの話を聞く限り あの男は、言葉巧みに幼い子供達を傭兵の様に鍛え上げている。

中には、その最中に死に逝く子達も少なくなかったそうなんだもの」

「おそらく この国の古くからの慣わしの王妃直属の乙女乙女を参考にしているんだろうね？

あれは、本人の覚悟も必要だというのに 老師のしている事は、一方的に過ぎない」

ユウリイが、小さく溜息をつく と 入口の扉が開かれた。

中に入ってきたのは、神妙な表情を浮かべたイリアだ。

「どこに行っていたのよ、イリアッ！

貴方がいない間に 偽者の貴方の部下を捕らえたのよ?」

コーネリアは、不安をぶちまけるように 声を張り上げる。

「ああ………済まなかったな?

思ったよりも 話を聞いていたら時間が経っていたみたいでさ?

いや………衝撃が強すぎて、我に返るのが遅すぎたのかもしれない
んだけど。

何ていうか やっぱり 血筋なんだと思うんだけどさあ?」

意味のわからない発言に 王と第一騎士は、顔を見合わせてしまった。

「イリア………今まで誰と話していた?
わかるように誰と何を話したのか教えてくれ」

どこか命令口調な主の言葉に イリアは、背筋を伸ばす。

「今から話しことは、口外しないで下さい。

それによつては、彼他の協力が得られなくなつてしまいますから」

珍しく真剣な顔をしている第二騎士に ユウリィとコーネリアは、
顔を見合わせた。

そして 2人は、頷く。

.....

王と女騎士は、話を聞き終えて 言葉を失ったまま。

話し終えたイリア自身も、冷や汗混じりだ。

「今の話は、本当なのか？」

やっと口を開いたユウリィは、真面目な顔をしている。

これが嘘ならば 極刑ものだろう。

「信じられないかもしれませんが 本当の事ですよ。」

俺だって 嘘だと思っちゃったんですから。

だけど あの子は、間違いなく あの人の子供です。

性格まで受け継いじゃっているから 悲しいことなんですけどね？」

苦笑している男の横で コーネリアが、やっと我に返る。

「だったら……<ローズ>の正体は？！

彼女も、彼らの知り合いってことなんじゃ？」

「そこまでは、話してもらえませんでしたけど 間違いないでしょうね？」

だとしたら あの不思議な感覚も、納得できるんですから」

イリアは、小さく息をついて 王座に座っている主に視線を向けた。

「彼らは、どこにいる？」

会って、詳しい話を聞きたいんだが………」

ユウリイの言葉に 男は、”そういう出すと書いていましたよ”と

苦笑する。

「団体だと目立つそうなんで 1人だけですけどね？」

ほら……………そこに……………」

その言葉を受けて視線を上げると フードを被った背の高い青年が、
その場に頭くちを垂れていた。

動き1（後書き）

少し先に王と第一騎士と第二騎士の3人が、
<ローズ>の正体に行き着きました。

動き2

王宮内は、王の突然の行動に慌しく走り回っていた。

誰もが、あれは 正気を失ってしまったのではないかと疑ってしま
ったほど。

けれど 王を守る騎士や側近は、何か知っているらしく 同じよう
にいつもの仕事に加え、動き回っている。

ただ違うのは、見知らぬ青年が 王の近くで話し込んでいることだ
ろう。

顔は、仮面のようなもので隠しているので 何者なのか判断できな
い。

けれど あれだけ優秀な王やその側近達が、信頼しているようなの
だから 只者^{ただもの}ではないはず。

「成る程……その話から符合^{ふごう}するのは、廃村^{あのはし}になるわけか」

ユウリィは、どこか思い口調で呟いた。

それを聞きながら 他の皆も、息を呑む。

導き出されたのは 誰もが、忘れる事の出来なかった場所だ。

先の戦争で かけがえのない犠牲を払ってしまった処なのだから。

今では、慰霊碑が建てられ 戦争において犠牲になった人々の名前が刻まれたり 銅像が建てられているはず。

「あのこを根城にするだなんて 何て奴なのかしらッ！」

ナディアは、怒りを隠すことなく 声を張り上げた。

そんな妹の様子を 王は、心配そうに見つめている。

「落ち着くんだ、ナディア。

確かに 怒るのも無理ない。

だが 今は、捕らえられていると思われるリーンとシャルロツテが心配しないと。

みんなに集まってもらったのだって 色々と忙しくなるから、そのことを説明するためであって」

王の間に集められたのは、王の側近に第一・第二騎士と王妃付きの侍女達にセレディー王子とその護衛のトッドだ。

ルチアは、宰相が部屋を離れざる得ない状況の為 結界を敷かれた部屋の中にルチアと一緒に待機している。

「ちよつと、待って？」

リーンは、心配なのはわかるかもしれないけど シャルロッテは大丈夫なんじゃない？

だって あの子…… あんな姿^{ナリ}しているかもしれないけど 男でしょ？

余ほどの事がない限り 危険は回避できるんじゃない？」

シャーリーの発言に 数人が、固まってしまう。

他の数人は、苦笑してしまっているらしい。

「この場で それをバラしちゃうわけだ。

まあ……知らないままなのも、気の毒なのが1人だけいるかもしれないけど

イリアは、空笑いした。

「どうしよう……私、普通にロッテの隣で制服着替えていたんですけど？」

間違いなく気の毒な犠牲者の高いトーンの声が、響く。

その発言をしたのは、赤毛の縦ロールを揺らしているアナスタシアだ。

彼女は、侍女長の姪であることから ルチアの代理として、この話に参加しているらしい。

「どうして 教えてくれなかったんですか？！」

私、相談事とか色々としちゃっていたんですけどッ！」

「アン……黙っていたことは、悪かったかもしれないけど 今は、

時と場所を考えなさいよ」

大きなお腹を支えながら ミイナが、大きな声を上げた。

「あの子は、元々 ナディア殿下の命を狙った老師によって送り込まれてきた刺客だった。

まあ……あまり気が乗っていなかった事と老師の事を快く思っていなかったこともあったから 私達側についてくれたのよ。

あの容姿は、周りを欺くのに利用できる。

だから あえて……侍女として王宮入りする身分を与えられた。

成長過程において 色々と極限的な環境だったため、成長も止まってしまうているそうなんだから」

「それに、アナスタシア。

ミイナも私もリンだって 元は、王族の命を狙った暗殺者の血縁者だってこと 忘れないで頂戴ね？」

ミイナに賛同するかのように 溜息混じりに話すシャーリーに アナスタシアは、肩を竦めてしまう。

「それで…………王自らが、その老師とやらがいる廃村に向かうのですか？」

ずっと黙り込んでいたセレディーが、口を開いた。

「そうなるね？」

場所が場所だし　長い間、城を留守にする事になるだろう。

イリアとリアを含めた、数人の騎士も連れて行くことと思っている」

ユウリイの言葉に　皆の顔が引き締まる。

王やその側近達の不在…………それは、ある意味　残っている者にとつて　最も緊張する日々になるのだから。

「廃村……………か。

あそこには、うちの両親も眠っているはずなんですよね？」

アナスタシアが、小さく呟いた。

それを聞いて　隣に立っていたナディアが、ハツとしたように息

を呑んだ。

「確か……アンの父親は、アーロンの同僚の騎士だったわね？

それで 神殿によって召喚しょうかんされた姫神子のジュリ様が母親……」

「うん……結局、亡骸も回収されなくて お墓だけが慰霊碑の村の中央部の端にあると聞いたんですよ」

聞いてはいけないことを聞いてしまった気がしたのか セレディーは、ソワソワしてしまっている。

けれど 王を含めた皆は、ただ黙っているだけだ。

赤子の頃から ルチアが背負って仕事をしている姿を見ていたためか、古くから城にいる者にとって アナスタシアの性格は、わかりやすいものなのだから。

それを肯定するかのように 赤毛の侍女は、先ほどの憂いなど直ぐに消え去っていた。

「確か その近くには、崖があって 高い塔がありましたっけ？

もしかして そこに本物のシャルロットさんとリーンさんが捕らわれていると考えているんですか？

あそこは、足場がない上に 落ちたら海の藻屑もくずになること間違いなしだそうですから、リーンさんも大人しく捕まってあげているのかもしれないね？」

アナスタシアの発言に 王も、同じ意見を持っているらしい。

「ところで 王がいない間……どうするんです？

<影>は、色々と動いてくれるでしょうけど 完璧とは言えない。

私だけでは、色々と制限されてしまいます」

シャーリーは、真剣な表情を浮かべて 発言する。

その言葉に ミイナが、申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

リーンは、浚あわれてしまっており ミイナは、現在 身重な状態。

「我々が、残りますから ご心配ありません」

凜としたその声に 皆は、驚いたように 視線を向ける。

その視線の先には、ずっと気配を消していたフードで顔を隠した集団が……。

「聞きそびれていたんだけど 彼等、何者なの？」

お兄様は、随分と信頼しているみたいなんだけど」

ナディアは、神妙な表情を浮かべ 視線だけは外していない。

「<ローズ>の大切な友人。

今は、その説明だけで十分だと思う。

信用するかについては、各自の判断に任せるつもりだよ」

ユウリイは、それだけ言い終えると 皆の顔の見返す。

「疑わしいことは、我々でも承知の上です。

けれど 同じ志を持っているのですから 助け合いませんか？

これ以上 犠牲は払いたくないんです」

壁にもたれている彼らの中で 一番 主人各であろう背の高い若者が、前へと進み出てきて 頭を下げる。

ナディアは、それを目の当たりにして ハッとしたように、急いで兄に視線を向けた。

ユウリイは、ただ微笑むだけで 何も言わない。

けれど 他の知らされていなかった面々も、何かを悟ったのか 顔を見合わせている。

動き3

「あの廃村へ向かわれるそうですね？」

ミリアムは、哀しげな表情を浮かべたまま言った。

その声色を聞いて 侍女や側近達は、息を吞んでしまう。

この空間に漂っている空気は、それだけ 緊迫してしまっているのだから。

そんな周囲の思いを知ってかしらるか ベットに倒れ込んだままの 儚げな女性は、目の前に立っている夫を見据えている。

「ああ 確固たる証拠があるわけじゃない。

だけど………何もないという証拠もないんだ」

珍しく真剣な眼差しを向けてくるユウリイに 王妃は、ただそれを見つめているだけだ。

しばらくの間、沈黙が続き ミリアムは、ゆっくりと身体を起こした。

周囲にいる皆は、ハツとしたように 目を見張る。

皆が息を吞んでいる中 王妃は、首に下げているモノを取り出し 囁くような声を発した。

「ご無事なご帰還を心より願っております。

<わたくしの心は 貴方の命> 「

高い声が、凜として部屋の中に響くと ミリアムは、薔薇の形をした石に口付ける。

すると 王妃の体全体が、光に包み込まれた。

これは、神聖なる儀式。

戦いの場に赴く前 夫たる者の命を支える者の誓い。

「別に 戦争に向かうわけじゃないのに」

心配そうに呟くユウリィに ミリアムは、目を細める。

「それでも 危険な場所でしょう？」

あそこは、始まりの場所であって 悲しみが続く場所でもある」

真剣な瞳を持つ妻に 男は、肩を竦めてしまう。

「リーンが、そこで拘束されている可能性も高い。

シャルロットもだ。

侯爵に、城を離れている間 滞在してもらおうと思っている」

「お父様が、呼ばれるの。

ならば 尚更……厄介なことが待っているのですね？」

聡い王妃の発言に 王の側近達は、顔を見合わせてしまっているようだ。

少し前にその話を聞いていた侍女達も、戸惑いを隠せていない。

「大丈夫ですよ、王妃様。

皆さん 無事に戻れますから」

1人の侍女が、ニツコリと微笑を浮かべて 膝をつき 断言した。

「貴女は……………」

見かけない銀髪の女性に ミリアムは、首を傾げる。

顔立ちは、誰かを連想させるような気もするが なぜかわからない。

「ジャンヌの申します。

王と皆さんが、王宮を離れている間 王妃様方のお側に仕えさせて
頂きます」

「話によれば 武術にも医術にも長けているらしい。

侍女としてならば シャーリー達もいるだろうから…………… ナディア
の助手になつてもらおうと思っただが」

ユウリイは、そう言って 黙り込んだままの妹に視線を向けた。

「知識の方には、問題ないからね？」

もう1人の彼女は、シャーリーの部下として 侍女見習いをする
ことになっているわ」

妹殿下の言葉を受けて メイド服姿の幼顔の少女が、チヨコチヨコ
と進み出てくる。

「初めましてえ…………… イブと申しますう。」

何かとご迷惑にならないよう 頑張りますからあッ！」

間延びな口調に 先輩侍女のシャーリーは、頭を抱えているしル
チアは、既に呆れ顔だ。

「何だか 楽しそうだわ？」

アンとも仲良くなれるんじゃないかしらね？」

その言葉に ルチアは、” そうでもないんですよ” と 息をつく。

「性格が被ると キャラ 拗ねてしまっているんですから。」

仕事だから 仕方がないというのに……あの子にも、困ったものです」

侍女頭の言葉を受けて ミリアムは、コロコロと笑う。

そんな妻の様子を見て ユウリイは、安堵したように胸を撫で下ろす。

「陛下……今からお出立になられるのですよね？」

お見送りができず 申し訳ございません」

ミリアムは、どこか哀しげに 夫である王に視線を戻した。

「いや……謝らないで欲しい。」

ミリアムも、無理せずに 健やかに過ごして欲しいから」

ユウリイは、ニツコリと優しい眼差しを持って 王妃の頬に触れる。

そんな夫婦の姿を見つめて 周囲の皆は、何とも言えない様子。

特に 年若い面々は、頬を赤らめてしまっているようだ。

「それでは……………用意がありますので 退室させて頂きますね？」

イリアは、咳払いしながら 身重な妻の手を引き 部屋を後にする。

その後に 皆も、置いていくと言わんばかりに 出て行った。

部屋の中に取り残された王と王妃は、苦笑しながら 互いの顔を見つめ合う。

出立

「ユウリイ……………無事に帰ってきてくださいね？」

必ず……………必ずですッ！」

ミリアムの言葉に 王は、無言のままで頷いた。

そして 彼を伴った一団は、城を後にする。

後に残された面々は、何かを願うようにして その姿が見えなくなるまで 見つめていた。

「大丈夫ですよ ミリアム王妃。

王は、必ず 帰られます。

勿論 貴女の大切な友人のリーン嬢も一緒に」

その言葉に 王妃は、涙を流したままの顔を上げて 頷く。

「ありがとう……………その言葉は、何よりも わたくしの心の励みに

なるわ？」

涙を拭いながら ミリアムは、微笑んだ。

「それでは、そろそろ お部屋に戻りましょう。

お体に 触ります」

シャーリーは、そう言つと ショールを 王妃にかける。

そして 他の侍女達に指示をする ルチアに視線を送り そのまま
建物の中へと入っていった。

「彼方方は、こちらに来ていただきます。

お部屋の方も 用意しておりますので 着替えてください」

侍女頭の言葉に ジャンヌとイヴは、背筋を伸ばす。

「我々の話を、全て 信じてくださっているわけでは、ないということでしょうか。

確かに 信じられない 内容かもしれませんが………」

ジャンヌは、別室に案内されて 目を細めた。

逆に イヴの方は、城の中で日の当たらない場所だということに気が付いていないのか どこか ひやいていいるらしい。

「確かに その通りです。」

けれど それと同時に……… 符合する事柄を、理解しているつもりです。

わたくし達の務めは、ミリアム様を精神的にも 身体的にも お守りすること。

あの方は、ずっと 辛い思いをして参りました。

今 ミリアム様のお心を支えているのは、陛下への愛なのです」

「ルチア様の気持ちは、お察しします。」

我々にも 命を賭けて お守りしたいと思う方がおりますから」

「そおですよ？」

主を思う気持ちは、同じなんです」

2人の真剣な眼差しに ルチアは、息を呑んだ。

彼女が、口を開こうとした時 部屋の扉が、勢いよく 開いた。

「ルチア様!!!」

3人は、あまり 見知られた侍女ではないが 申し分のない仕事をこなす 新米の侍女の3人娘だ。

彼女達は、上級貴族の娘達だが 他の傲慢な令嬢達とは、違い 礼儀を弁えている。

敢えて 問題を指摘するならば 身分に関係なく人に接する事と素直すぎるということだろう。

思ったことを、そのまま 口に出してしまうことも多々あり 助かることの反面 面倒に巻き込まれることも、少なくない。

「一体 どうしたのです。

3人共 落ち着きなさい。

王宮侍女なのですから」

年配の侍女頭は、動じることもなく 落ち着きを払っている。

「<ローズ>さんのお部屋の掃除をしていたんですけど………」

「そうしたら 突然 声が聞こえて………」

「声の聞こえる方も振り向いてみたら………」

「『<ローズ>ちゃんが、目を覚ましたんですッ!!!』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3494m/>

硝子の薔薇

2011年1月21日08時37分発行